一村一志関連新聞記事集　目次

1	1995年2月　山陰経済ウィークリー 出版事業をスタート　第1弾は八雲村の周藤彌兵衛　郷土の偉人をシリーズで紹介	3
2	1995年4月　日本経済新聞 「郷土の偉人」にスポット　人材育成の〝刺激剤〟小説・児童文学・漫画を出版	4
3	1995年4月　山陰中央新報 偉人・周藤弥兵衛の伝記　HNS研究所が出版　松江で記念シンポ開く	5
4	1995年5月　島根日日新聞 「一村一志」のスローガンかかげ　HNS研がシンポ	6
5	1995年5月 「一村一志運動」提唱　高い志で地域振興	7
6	1995年6月　山陰中央新報 周藤彌兵衛　郷土の偉人描く３部作	8
7	1996年7月 佐陀川開削 郷土の偉人　「清原太兵衛」の小説募集　鹿島町 合併40年事業、来春に出版	9
8	1997年1月　山陰中央新報 鹿島 清原太兵衛の功績　たたえる公募小説　大賞に寺井さん（松江）	10
9	1997年10月　山陰中央新報 佐陀川開削に尽力「清原太兵衛」3冊セット　鹿島町が出版 郷土の偉人　もっと知って 全戸に無料配布	11
10	1997年11月　山陰中央新報 人と水のシリーズ2　清原太兵衛　三分野の力作同時に	12
11	1997年12月　山陰中央新報 人気上々の清原太兵衛伝　郷土見つめる機会に　5週連続「ベスト10」	13
12	1998年4月　内外情勢 水路開削した先人に光	14
13	1998年5月　朝日新聞 「郷土の偉人」を発掘　一村一志運動を提唱　HNS研究所が伝記	16
14	2002年8月　山陰中央新報 小説・治水の偉人―大梶七兵衛　寺井敏夫著　義民の偉業克明に描く	17
15	2010年10月 しまね人物列伝　神話の里、出雲の治水に生涯をかけた偉人	18
16	2010年11月　山陰中央新報 「出雲三兵衛」　漫画韓国語版で出版	19
17	2010年12月　中国新聞 出雲の治水、韓国に紹介	20
18	2010年12月　島根日日新聞 出雲の治水の偉業を韓国へ　出雲三兵衛を韓国の新聞記者が取材	21

一村一志関連新聞記事集　目次

19		2011年1月　国民日報 大梶七兵衛	22
20		2011年1月　国民日報 清原太兵衛	23
21		2011年1月　国民日報 周藤彌兵衛	24
22		2014年7月　山陰中央新報 周藤彌兵衛の銅像建立　松江の研究所　1日に除幕式	25
23		2014年8月　中国新聞 彌兵衛の偉業たたえ銅像　地元企業が贈与	26
24		2014年8月　山陰中央新報 町おこしに生かしたい　周藤彌兵衛銅像除幕式	27
25		2014年8月　毎日新聞 彌兵衛の銅像完成　松江で除幕式　治水に尽力	28
26		2014年8月　島根日日新聞 治水の偉人の銅像完成　小松電機産業が寄贈	29
27		2014年8月　日本水道新聞 彌兵衛翁の銅像除幕　偉業を称え「水の日」に小松電機産業が寄贈	30
28		2014年8月　水道産業新聞 水の偉人の銅像を贈呈　松江市内に設置し除幕	31
29		2014年10月　環境ソリューション 周藤彌兵衛翁の物語から生まれた　やくも水神	32
30		2015年10月　山陰中央新報 周藤彌兵衛の生涯紡ぐ　取材重ね「悠久の河」出版	34
31		2016年8月　山陰中央新報 水と火の祭を住民楽しむ	35
32		2019年6月　日本海新聞 水の偉人たたえ松江で顕彰祭　関係者ら祈りささげる	36
33		2020年4月　建材Navi バルトン銅像制作・設置を提唱	37
34		2022年10月　日本海新聞 「治水の郷土偉人」図書贈る	39
35		2023年11月　日本海新聞 郷土の水の偉人　図書を小学校に寄贈	40

出版事業をスタート

第1弾は八雲村の周藤彌兵衛

郷土の偉人をシリーズで紹介

自動開閉するシートシャッターなど制御機器メーカーの小松電機産業㈱（島根県八雲村、小松昭夫社長）は、郷土の偉人にスポットを当てた人物伝記の出版事業に乗り出した。先人の偉業の紹介を通して、夢とロマンを備えたチャレンジャーを育てたいとする小松社長が、出版活動という形で構想を実現させた。全国各地に手を挙げてもらいながら地域の先人を掘り起こし、シリーズで紹介していく方法で「一村一志運動につないでいく」とユニークだ。

出版事業も同研究所の活動の一環として手掛けることになった。

出版では、先人の偉業から未来を見つめる狙いで、郷土の環境と生活のために生涯を捧げた人たちを取り上げていくことにした。第一巻は、本社を置く島根県八雲村で江戸時代に生きた偉人、周藤彌兵衛を紹介＝写真＝。五十歳代半ばから四十年余りにわたり岩山を削り、意宇川の流れを変え、洪水の苦しみから地域を救った彌兵衛の生涯を描いた。

各年齢層が手にできるように、児童文学、小説、漫画をそろえる予定で、既に児童向けと小説の初版本がそれぞれ五千部ほど刷り上がった。漫画本は近く完成する予定で、三種類がそろうのを待って出版披露することにしている。三種類はいずれもハードカバーの単行本で、小説が千四百円、児童向けと漫画は千三百円、ケース入りの三冊セットを四千円とした。どの購読者層の関心が高いかなどを調査するため書店には置かず、口コミによりPRしていく方針。

菓子の詰め合わせの感覚で「感動した本をお土産にする文化を広げたい」（小松社長）との考えで、三冊セットによる普及に力を入れていく。目の不自由な人のためにはテープライブラリーを作成したり、中国語訳を出版する計画もある。

第二巻以後は、全国各地に題材を求めていく予定で、史実の掘り起こしは地域に委ね、出版について支援していくことにしている。同研究所では広く賛同者を募り、将来的には基金制度によって出版事業を運営していく考えで、財団法人の設立を検討している。

小松電機産業 HNS研究所

同社では、新たなものへ積極的に挑戦する人間を育てようと、HNS（人間・自然・科学）研究所を平成六年十月に設立。広く国内外に講師を求め、研修交流の場を地域に提供するなど、人づくりを進めようとしており、小松社長の四年来の構想だった

1995.04.29　山陰中央新報

「郷土の偉人」にスポット

洪水防ぐため岩山くりぬいた周藤弥兵衛

児童文学・小説・漫画の3点

HNS研究所

人材育成の〝刺激剤〟

小説・児童文学・漫画を出版

郷土の偉人にスポット――。HNS（人間・自然・科学）研究所（松江市、小松昭夫代表）は、江戸時代に四十二年かけて岩山を削り、切り通しを開いた周藤弥兵衛を紹介する小説、児童文学、漫画を同時に出版した。郷土のために生涯をささげた先人の足跡をたどることによって、町おこしや人材育成に結び付ける。

HNS研究所は、水処理装置など制御機器製造の小松電機産業（島根県八雲村、小松昭夫社長）が設立。同社の研究開発、人材育成、社会貢献を担当している。活動の一環として地域の「人と水」をテーマにした出版を続ける予定で、全国の自治体などに「郷土の偉人」の再発見を働き掛ける。先人の活動を小説、児童文学、漫画の三点セットで紹介することで、活字離れが言われる子供たちに読書の機会を提供する。

周藤弥兵衛は出雲の国日吉村（現在の八雲村）の下郡（大庄屋）で、洪水を繰り返す意宇川の流れを変えるため、五十六歳から岩山をくりぬく作業に入り、一七四七年、九十七歳で切り通しを完成。菊池寛の「恩讐の彼方に」で知られる「青の洞門」に先立つ事業とされる。本の価格は小説千四百円、児童文学と漫画がそれぞれ千三百円。

1995.04.29　山陰中央新報

偉人・周藤弥兵衛の伝記
HNS研究所が出版

念記開く
松江でシンポ

島根県八雲村を洪水から救った江戸時代の偉人・周藤弥兵衛の一生を描いた伝記がHNS（人間・自然・科学）研究所（松江市、小松昭夫代表）により刊行され、二十八日、松江市内のホテルで出版を記念するシンポジウムが開かれた。

周藤弥兵衛の伝記出版を記念して開かれたシンポジウム＝松江市千鳥町、ホテル一畑

同研究所は、制御機器メーカーの小松電機産業（八雲村、小松昭夫社長）が昨年十月に設立。地元の先人の偉業紹介を通して郷土愛をはぐくもうと伝記出版の準備を進めてきた。

周藤弥兵衛は、八雲村の治水に生涯をささげた人物で、五十歳代半ばから四十年余りにわたり岩山を削り、はんらんを繰り返していた意宇川の流れを変えた。伝記は各年齢層が手にできるように、児童文学、小説、漫画をそろえ、初版本としてそれぞれ五千部出版した。三種類ともハードカバーの単行本で、小説千四百円、児童向けと漫画は千三百円で、二冊セット、三冊セットもそろえており、島根県内十九の指定書店などを通じて販売する。

出版記念シンポジウムには二百八十人が参加。長野忠・山陰中央新報社論説主幹をコーディネーターに、各本の作者や治水関係者らが史実をたどりながら弥兵衛の業績を検証した。八雲村では周藤弥兵衛の顕彰準備委員会が動き出しており、会場では弥兵衛の偉業を音楽で表した八雲小の創作曲がビデオで紹介された。

1995.05.02　島根日日新聞

「一村一志」のスローガンかかげ

HNS研がシンポ

二十八日、松江市千鳥町のホテル一畑で、「周藤弥兵衛シンポジウム」が開催された。

同シンポジウムは、八束郡八雲村に本社のある小松電気産業株式会社が松江市浜乃木町へ工場進出するに伴い開設したHNS研究所が主催。

周藤弥兵衛は出雲の国・意宇郡日吉村（現在の八束郡八雲村）の大庄屋だった人。延宇四年（一七四七）、当時の日吉村は、同村内を流れる意宇川が毎年のように氾濫。弥兵衛は岩山の剣山をくりぬくことによってこれを解決した。

HNS研究所はこの周藤弥兵衛の偉業をたたえ、「一村一志」のスローガンをかかげている。同研究所本部長佐々木武男氏は、「HNS（人間・自然・科学）研究所は、混迷の時代にあって人間の生きるべき指針を先人から学ぶ運動である。これから八雲村にかぎらず、この志をかかげる地域にはいくらでも（運動の）ノウハウを教えます。」と説明している。

同研究所は周藤弥兵衛に関する出版物を小説・漫画・児童文学として三冊発行している。問い合わせは松江市浜乃木2－6－9宅和ビル6号　HNS研究所。

良さん。

今回のメインスローガンは「働くものの団結で生活と権利、平和と民主主義をまもろう！」。市役所前からJR松江駅へ向けてデモ行進した。なお連合島根は西川津町の市北公園に約五千人を集めて開き、今年も分裂メーデーとなった。

1995.05.18

小松電機産業社長

小松　昭夫氏

「一村一志運動」提唱

高い志で地域振興

いま、私は山陰の小さな村（島根県八雲村）から全国へ向けて「一村一志運動」を提唱している。よく知られている「一村一品運動」がモノで村おこしを目指したのに対してココロ、高い志で地域の振興を図ろうというもの。そして運動の推進役となるのが地域に生きる企業である。

もう少し具体的にいうと、当社は昨年、ＨＮＳ（人間・自然・科学）研究所を設立した。産業の空洞化、高齢化と環境問題など社会、経済の混迷する状況にあって人間、自然、科学の新しいかかわりを見直し、「本物の価値」を創造する時ではないか、と考えたことが背景になっている。このためＨＮＳ研究所では本来の研究開発と並んで、社会貢献を大きな事業の柱に掲げており、これを具体化するものが「一村一志運動」だ。

では何をするのか。当社ではこの四月にＨＮＳ研究所から『周藤彌兵衛』を小説・児童文学・漫画の三部作として出版、シンポジウムも実施した。周藤彌兵衛は当社のある八雲村で、江戸時代に村を洪水から守るため五十六歳で一念発起、九十七歳までかかって岩山を切り抜き、川の流れを変えた「郷土の偉人」。

その偉業、高い志にスポットを当てることで未来への道筋を発見する、というのが運動の趣旨である。

むろん、「郷土の偉人」はどの村、地域にもいるはずで、手法も出版に限らず、石碑の建立や記念館建設、舞台劇化などいろいろある。企業に行政、住民と三者が一体になることで心の村おこし、町おこしにもつながる。その地で生まれ、育った企業が地域と「共生」する姿ではないか。高い志のネットワークを目指すこの運動が全国的、さらには世界に広がることを私としては期待している。

1995.06.05　山陰中央新報

郷土の偉人描く3部作

周藤彌兵衛

〈交易場修、村尾靖子、小室孝太郎著〉

島根県意宇郡六十七カ村の大庄屋周藤彌兵衛は宝永三年（一七〇六）、日吉村の度々の洪水を防いで村人の難儀を救うため、意宇川の日吉切通しを拡幅しようと決意したが、松江藩の財政難のため、家財を投じ、一人で岩山に向かった。五十六歳で始めた工事が完成した時、彌兵衛は九十二歳であった。

松江市の南、八雲村の日吉切通しには、今も繋（のみ）の跡が残り、川は豊かに流れている。

菊池寛の名作で知られる青の洞門は、僧禅海が三十年をかけて一七六五年に完成した。二つの工事は十数年同時に進行し、日吉の切通しは一七四七年に一足早く完成した。

彌兵衛は工事の途中で僧になり、良刹と名乗った。人々の苦難を救う開削工事が、どちらも独力で、僧の手によったことは因縁が深い。

なお、彌兵衛に工事を決意させた出雲地方の大水害は元禄十五年のことで、江戸では赤穂浪士の討ち入りがあった。

日吉の切通しは、藩政のトップである藩主の決断と担当役人の藩の財政難の中での誠実な推進と、藩に頼ることをあきらめた村の代表の大庄屋と、それぞれの階層のリーダーたちの努力のたまものと言える。そして、最も苦労した周藤家の跡は今はない。

一人の発行者が、三人の作者に、周藤彌兵衛の業績をそれぞれの表現方法で創作することを依頼し、地方出版した。交易場修著「小説・治水の偉人」、村尾靖子著「児童文学・川の流れを変えた人」、小室孝太郎著「漫画・治水の英雄伝」である。

珍しい企画だ。この三部作によって、児童、生徒、成人の各年齢層が自分の好みの表現で読めるので、読者の範囲が広がるという狙いがある。また、比べて読むことで、三人の作者が、彌兵衛とその時代をどのように書いているか、違いが分かって興味深い。

発行所の代表小松昭夫氏は「郷土の人々の環境と生活のために生涯を捧（ささ）げた偉大な先人にスポットを当てて現代に甦（よみがえ）らせ、その足跡をたどることで未来への道筋を発見する」一村一志運動を提唱し、その一つとして「人と水」出版シリーズを企画した。

本は書店に置かず、直接発行所に申し込むことになっている。

（曽田寛＝元島根県学校図書館教育協議会会長）

（HNS研究所＝松江市浜乃木二―六―九、宅和ビル六号、電話0852・21・8420。小説一四〇〇円、児童文学一三〇〇円、漫画一三〇〇円）

1996.07.06

佐陀川開削 郷土の偉人

「清原太兵衛」の小説募集

鹿島町 合併40年事業、来春に出版

鹿島町は町合併四十周年記念として、郷土の偉人を決め、宍道湖と日本海を結ぶ佐陀川開削に身をささげた「清原太兵衛」（一七一二―一七八七）に関する顕彰事業に取り組むこと。顕彰事業に取り組むこと。結ぶ佐陀川開削に身をさげた「清原太兵衛」（一七一二―一七八七）に関する懸賞小説を募集する。採用作品は来春出版し、郷土史学習の教材にするとともに「広く小説を募集することで、新たな資料発掘にも期待したい」としている。

松江藩に仕えた清原太兵衛は、水害に悩む松江城下を見て、宍道湖北岸と日本海を結ぶ水路の必要性を痛感。藩の許可を得て一七八五年、七十四歳のとき、工事に着手。自らが設計して全長十二キロの佐陀川開削を指揮。完成を目前に没した。

佐陀川の開削によって松江城下は水害から救われ、松江と日本海を結ぶ水路の完成で、鹿島町発展の基礎が築かれた。以後、佐陀川を活用して水産物が松江に運ばれるなど、人や物の往来が活発になり、港や町が栄えていく。町では六年に顕彰会が発足、公民館活動で研究が行われている。

募集する顕彰小説のテーマは「清原太兵衛翁の偉業」。四百字詰め原稿用紙二百五十―三百枚以内。十二月六日必着で、郷土史家の藤岡大拙氏らが審査にあたる。入選作一点に賞金百万円、佳作三点に記念品が贈られる。

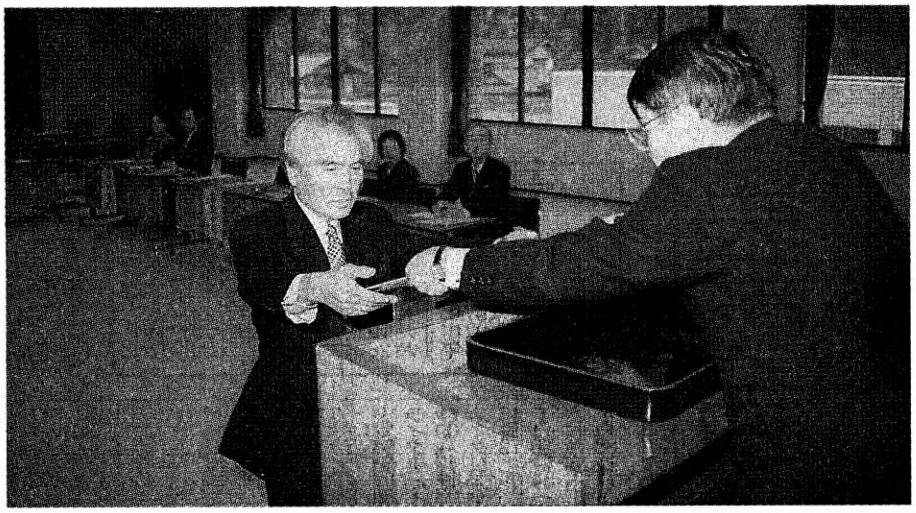
入選した小説は既に作者の決まっている漫画、児童文学と一緒に来春、出版する。執筆の参考に、清原太兵衛の足跡をたどる見学会を二十八日に開催する。問い合わせは松江市浜乃木、HNS研究所（電話0852・21・8420）へ。

記念事業ではこのほか、同町出身で、魯迅との交遊で知られる中国文学者「増田渉」（一九〇三―一九七七）の顕彰事業も計画。今夏、町内の中学生と青年四十人を中国に派遣する。

1997.01.28　山陰中央新報

大賞に寺井さん（松江）

鹿島　清原太兵衛の功績たたえる公募小説



大賞を受賞し、山本鹿島町長から表彰される寺井敏夫さん

原稿用紙290枚の大作「人柄に魅せられた」

佐陀川開削に身をささげた郷土の偉人「清原太兵衛」（一七一二―一七八七）の功績をたたえようと、鹿島町が全国から公募した懸賞小説の入選発表、表彰式が二十七日、鹿島町役場で開かれ、大賞には寺井敏夫さん（六二＝松江市東本町、団体役員）が選ばれた。

懸賞小説は、同町が合併四十周年記念事業の一環として昨年七月から募集し、十二月の締め切りまでに関東、四国など県外から四人、県内から五人の計九人が応募した。

入選発表、表彰式で山本清澄町長が「清原太兵衛の佐陀川開削により松江城下は水害から救われ、航路や新田開発で鹿島町発展の基礎が築かれた。これからも功績を語り継いでいきたい」とあいさつ。審査委員長の藤岡大拙・八雲立つ風土記の丘所長が最終選考に残った四点の審査結果を発表し、大賞に寺井さん、佳作に安達光雄さん（鹿島町手結）、岩田昭三さん（神奈川県川崎市）、柴田宗徳さん（愛媛県保内町）の三人が選ばれた。

表彰式では、寺井さんに山本町長から賞状と賞金百万円、佳作の三人には賞状と記念品の八雲塗の額が贈られた。

寺井さんの作品は四百字詰め原稿用紙二百九十枚の大作。九月上旬から三カ月かけて書き上げた。寺井さんは「七十歳をすぎてから工事の指揮をとった清原太兵衛の人柄や執念に魅せられました。機会を与えていただいたことに感謝しています」と受賞の喜びを語っていた。寺井さんの作品は近く、小説として出版される。

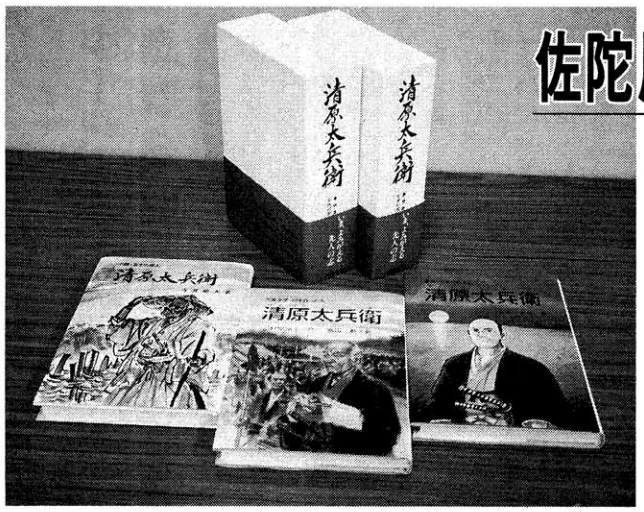
清原太兵衛は松江藩に仕え、宍道湖北岸と日本海を結ぶ水路の必要性を訴え、天明五（一七八五）年、工事に着手。全長十二キロの佐陀川開削難工事を自ら設計、指揮し、完成を目前にして死去した。

1997.10.08　山陰中央新報

佐陀川開削に尽力「清原太兵衛」

3冊セット 鹿島町が出版

応募小説 児童文学 マンガ



鹿島町が出版した「清原太兵衛」の小説と児童文学、マンガの3点セット

郷土の偉人もっと知って 全戸に無料配布

鹿島町が、同町内の佐陀川開削に身をささげた「清原太兵衛」をテーマに懸賞募集した小説が、このほど出版された。小説に併せて「清原太兵衛」の児童文学とマンガも刊行され、三冊セットで全戸配布。町では「郷土を開拓した偉人の業績を大人から子供まで知ってもらいたい」と話している。

小説は昨年、町合併四十周年記念事業として一般から募集。昨年七月から十二月までに全国各地から九人が応募した。作品を島根女短大の藤岡大拙学長らが審査。最終選考に残った四編の中から、小説としての面白さや歴史的な資料を十分に生かした内容などから、松江市東本町の寺井敏夫さん(六三)＝JA島根県共済農業協同組合連合会専務＝の作品が選ばれた。

小説はA5判、百九十二ページ。江戸中期、清原太兵衛が水害に悩む松江城下を見て水路の開削を決意。宍道湖北岸と日本海を結ぶ水路＝の業績が、だれにでも分かりやすく、読みごたえのある表現で描かれている。

この小説に併せて町では、将来を担う若い世代にも先人の偉業を知ってもらおうと、マンガ（小室孝太郎作）と児童文学（村尾靖子作、高田勲挿絵）も刊行。三冊セットで町内の全世帯二千四百六十一戸と、学校や公民館などに無料配布した。

1997.11.03　山陰中央新報

読書

人と水のシリーズ2　「清原太兵衛」

三分野の力作同時に

「佐陀川開削に心血・清原太兵衛」「功績をたたえいかだ下り」。これは過日、山陰中央新報紙で報道された新聞記事の見出しである。島根県鹿島町は平成八年度が町の合併四十周年に当たることからいろいろな記念事業を行っている。

今回、出版された小説「清原太兵衛」も懸賞に応募され一席に入選した作品である。発行所からは、この小説とともに同じく清原太兵衛を主題とするマンガと児童文学も刊行された。数年前に刊行された「周藤弥兵衛」三部作につぐ快挙といえる。

佐陀川は天明五（一七八五）年から七年の秋にかけて松江藩の普請により開削された川である。その中心となって尽力したのが清原太兵衛だ。十七世紀半ばごろまで日本海に流れていた斐伊川が大洪水によって、その流れを変え宍道湖に注ぐようになった。そのため洪水のたびに大量の水が流れ込み、松江城下はもちろん、周辺の村々の人家や田畑に大きな被害を与えた。これを解消するには宍道湖から別の排水路を造るしかなかった。

これには先見の明をもち、開削の必要性を訴え続けていた太兵衛の策が採用された。周囲の抵抗もあったが、工事は三年の計画で進められ、天明七年に完成した。太兵衛七十六歳のときであった。周藤弥兵衛による日吉村切り通し工事完成の四十年後のことである。飢饉（きん）に苦しむ農民たちによる天明の打ち壊しが全国に及んだ年でもあった。

ところで後世に残る偉業を成し遂げた太兵衛とはどんな人物であったのか、どんな生きざまだったのか、不明な部分が多い。残されたわずかな資料を手掛かりに三人の作家が、それぞれのジャンルに応じて独自の構想と表現方法により、想像を巡らし渾（こん）身の力で書き上げている。

古希を超えた下級身分の老役人が一生の仕事と、自らに言い聞かせた計画を何度となく藩に申し出る熱意には心打たれるものがある。その熱意と誠実さが開削完成の前年に身分を武士に昇格させたものの、それに甘んじることなく、工事の遂行に全力を注ぐ姿に信念に生きる人間の偉大さを感じさせる。

「新しいことをやる時には敵半分味方半分…」

「人間、志を持ち続け、努力し続けることこそ大切であるぞ」

「今日の日評価を受けるものは、明日の日には消えるものよ」

これは終わりに近い部分で三人の作家が登場人物に語らせている言葉である。

世を去る直前の太兵衛の言動にも、作家それぞれの熱い思いが込められており圧巻である。

三冊の本を読み比べてみれば、内容がそれぞれ多少違っているのに気づく。それは詳細な記録に基づく伝記ではなく、創作の世界であるから当然のことといえるが、そこに読むことの楽しさがあることも確かである。

（錦田唯雄＝島根県学校図書館協議会会長）

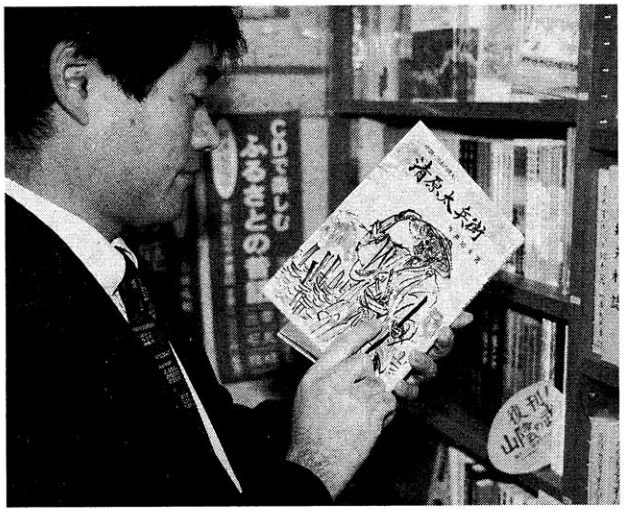
……

「人と水のシリーズ2　清原太兵衛」は、HNS（人間・自然・科学）研究所刊。▽漫画「治水の偉人伝　清原太兵衛」（小室孝太郎著・一三〇〇円）▽児童文学「川を作った人　清原太兵衛」（村尾靖子著・一三〇〇円）▽小説「治水の偉人　清原太兵衛」（寺井敏夫著・一四〇〇円）の三部作。

1997.12.04　山陰中央新報

人気上々の清原太兵衛伝

佐陀川開削に活躍



郷土の偉人伝記として静かな人気を呼んでいる「清原太兵衛」

宍道湖と日本海を結ぶ佐陀川開削に身をささげた清原太兵衛の生涯を描いた伝記本が、地元の鹿島町や松江市で人気を呼んでいる。松江市内の書店の人気本ベスト10に十月から五週連続で名を連ねるなど、書店関係者は「中年層を中心に関心を呼んでいる。郷土をあらためて見つめ直す伝記」と評価している。

郷土見つめる機会に

松江の書店　5週連続「ベスト10」

発行所は、県内の地元の偉人の顕彰活動として出版事業を手掛けているHNS研究所（松江市浜乃木、佐々木武男本部長）。これまでに、江戸時代の大規模な河川改修に私財を投げ打ち、八雲村を洪水から守った周藤弥兵衛の伝記も出版している。

清原太兵衛は、江戸中期に宍道湖北岸と鹿島町側の日本海を結ぶ水路の開削工事に生涯を懸けた人物。町合併四十周年を迎えた鹿島町が懸賞募集した小説に加え、漫画、児童文学の三部作をそろえて出版した。

松江市などでは同社が書店を通じ十月から販売を始めたところ、徐々に人気が上昇。松江市殿町の今井書店のベストセラー調べによると、十月二十七日に初めて十位入りした後、十一月十日の五位を最高に五週連続でベストテン入りを記録した。

地元の偉人を取り上げた伝記の人気に同店の佐藤安政店長は「中央までは名が通っていないが地域に貢献した先人は多く、そこにスポットを当てた類書はなかった。郷土の偉人に新たな発見があるのではないか」と話している。

水路開削した先人に光

島根県鹿島町はこのほど、宍道湖と日本海を結ぶ佐陀川を開削し、宍道湖沿岸の水害を克服した旧松江藩士の伝記を町村合併四十周年を機に発刊した。先人の偉業に光を当てた作品が、町民の郷土への愛着と誇りを呼び覚ますきっかけになっているようだ。

同町は県都松江市の北西に位置し、日本海に面する人口八千七百人の漁業が盛んな町。一九五六年、恵曇町を核に佐太、御津、講武の三村が合併して発足した。町を東西に横断する佐陀川は十八世紀後半に完成。松江市の宍道湖から県内有数の水揚げを誇る恵曇港まで約八キロを流れている。

伝記3部作を出版

同町は町村合併四十周年を迎えた九六年、記念事業として同川を開削した先人の伝記を世に出すことを決めた。

伝記の主人公は松江藩士、清原太兵衛。宍道湖沿岸は十七世紀から頻繁に洪水に見舞われていた。農家に生まれた太兵衛は幼いころから、水につかった湖岸の惨状を目にするうちに水害の克服を決意。松江藩に取り立てられ藩の要職にあっても初志を忘れず、新水路の開削を十二回にわたって藩に訴える。大飢饉（ききん）の天明四年（一七八四年）、七代藩主松平不昧がようやく工事を許可。時に太兵衛七十三歳。自ら工事の陣頭指揮を執り、翌春に着工。湿地帯での難工事に犠牲者も出たが、一七八八年一月に新川は開通式にこぎつける。一方、太兵衛は竣工（しゅんこう）を目前に七十六歳で他界した。以後、宍道湖の水位は低下して洪水も減るとともに、湿地帯は田畑に生まれ変わり、川は松江と日本海を結ぶ通路となった。

伝記の出版はＨＮＳ研究所（松江市、佐々木武男所長）に委託した。同研究所は地元ベンチャー企業の雄、小松電機産業（同市）の小松昭夫社長が設立。「一村一志運動」として地域おこし事業の企画立案に取り組むなど、独自の活動で知られている。作品は子供からお年寄りまで家族全員で楽しめ、また子供が成長段階に応じた作品を読めるようにと漫画、児童文学、小説の三部作とした。漫画は故手塚治虫さんに師事した小室孝太郎さんに、児童文学は県在住の作家、村尾靖子さんに委託。小説は懸賞金付きで一般公募したところ、町主催の現地見学会に二十一人が参加。最終的に九作の応募があり、農業経営問題の論文や歴史小説の執筆歴を持つ寺井敏夫ＪＡ島根共済連専務が一席を獲得した。

太兵衛の生き方に感銘

作品は初版一万五千部を発行。町内全二千五百世帯と小中学校に配布し、地元書店でも販売上位に食い込んだ。昨年、町が児童・生徒を対象に読書感

=島根・鹿島町=

懸賞小説入選者。中央が1席の寺井敏夫さん

太兵衛が開削した佐陀川

伝記3部作

想文を募ったところ、三百三十九作の応募があった。最優秀賞の鹿島中学三年の安達洋子さんは「夢をあきらめなかったことと、そういう人がかってここに存在したということが、私にはとても励みになります」と、太兵衛の生き方に強い感銘を受けたことを書いている。出版を引き受けたHNS研究所の佐々木所長も「今の子供は冷めているというが、大人がきっかけを作ってやれば熱くなることが分かった」と手ごたえを感じている。

松江市から町役場を経て恵曇港に向かう県道を走ると、佐陀川が一直線に伸び、人工河川であることが分かる。しかし、これまでは町民でさえ川をつくった太兵衛の名は知っていても、人柄や情熱まで知らない人が少なくなかったという。古瀬篤企画課長は、山本清澄町長の太兵衛顕彰への熱意が今回の出版を可能にしたと指摘した上で、「本を読んだ人が川を汚してはいけないとか、自分も太兵衛のように何か人の役に立ちたいと思うようになれば……」と期待を込めるとともに、「本として残り、人の心にも残る」と伝記出版の意義を語っている。

時事通信社松江支局・伊藤幸二

1998.05.30　朝日新聞

山陰

自分たちの町を、地に足着いた日々の営みを大切に思う暮らしの中から、少しずつ地域が変わってきている。食品の安全や環境に対する組合員の関心を活動の基礎に置く鳥取県生協。郷土の先人たちの足跡をさまざまな形で残し、次代につなごうとする島根県の人々の試み。二十一世紀へのカウントダウンが始まった今、山陰各地で躍動感あふれる動きが続いている。

「郷土の偉人」を発掘

一村一志運動を提唱

HNS研究所が伝記

現代によみがえった「清原太兵衛」の物語。写真は漫画版

時の流れに埋もれた郷土の人々を掘り起こそう――松江湖南テクノパークにある「HNS（人間・自然・科学）研究所」（松江市乃木福富町）が展開しているユニークな「一村一志運動」。これまでに、二人の「偉人」の伝記出版が実現している。

同研究所は地元企業、小松電機産業㈱の小松昭夫社長が設立。現代社会の行き詰まりを打開するため、人と自然、科学の関係を一から見直すことをテーマに掲げている。

この「一村一志運動」もその一環。事業者を募り、地域に貢献した先人の活動を、小説、児童文学、漫画の形で広く紹介し、これからの社会を考える一助としていく。

これまでに登場したのは「清原太兵衛」と「周藤彌兵衛」。ともに江戸時代、島根の地で水害から人々を守るためにすべてをかけて尽力した人物で、「清原太兵衛」は鹿島町が合併四十周年記念事業として製作したものだ。原作（小説）は一般公募され、遠く北海道からも問い合わせがあったという。

同研究所の佐々木武男本部長は、「今の子どもたちはさめているといわれるが、寄せられた感想文を読むと、率直に感動し、困難に自分で立ち向かおうという思いも読み取れる。これからの時代、それが大切ではないでしょうか」と話す。

今後、賛同者を募り、全国展開していきたい考えだ。

HNS（人間・自然・科学）研究所は☎〇八五二（二二）八四二〇。

小説・治水の偉人
—大梶七兵衛

寺井　敏夫著

義民の遺業克明に描く

本書は、出雲の高瀬川開削など治水・開拓事業に尽くした大梶七兵衛の、親子孫三代にわたる苦闘を描いた伝記小説である。松江藩とのあつれきから親子二代が悲運に終わり、三代目にしてようやく念願を達成、名誉を回復するという壮大な物語である。

通読して、出雲平野の開拓にかける七兵衛の志の高さと、わが身の不幸を顧みぬ大梶家三代の献身的な働きぶりを克明に描いた、スケールの大きさに圧倒される。

特に、作品が説得力を持っているのは、作者が「義民の思想」で主人公の七兵衛をとらえているからである。周知のように、義民とは、封建時代に社会の底辺にいる農民や町人のために、わが身と身代をなげうって尽くした人のことである。大梶家三代の治水事業は、まさしく貧しさにあえぐ出雲地方の農民を救うための義民による義挙であった。

主人公が活躍した一六〇〇年代は、戦国時代が終わり、各藩は農本主義のもとで競って新田開発に伴う治水事業を推進した時代であった。松江藩も財政を確立するため、出雲平野の開拓は至上命題であった。

他方、七兵衛は農民を貧困から救済したいとの一念で、治水事業に精励した。これらの治水事業で、出雲平野の米作は一挙に二万石以上の増収になり、斐伊川から運河を通って奥出雲—日本海への物流が可能になったのだから、いかに大事業であったか分かる。

財政の確立を目的とする松江藩と、貧しい農民を救済しようと立ち上がった七兵衛との対立は不可避であった。大梶親子に地所・身分の剥奪（はくだつ）、処刑などの数々の理不尽な災難が降りかかる。

作品は、計算された構成と平明達意の文章、老練な語り口で出色の出来栄えになった。

作者は元農協職員で、現在、島根県文学連盟理事として活躍。これまで『清原太兵衛』『隠岐の嵐』を出版して注目されている。ぜひ一読を勧めたい。

（池野誠・島根県文学連盟会長）
（HNS人間・自然・科学研究所・一四〇〇円）

2002年8月25日　山陰中央新報掲載

しまね 列伝 人物 第十二回

神話の里、出雲の治水に生涯をかけた偉人

周藤彌兵衛

岩を切りつづけて42年 意宇川の流れを変えた

1651年(慶安4年)〜1752年(宝暦2年)

古来から、出雲の国・意宇郡日吉村（島根県八束郡八雲村）を流れる意宇川は数年おきに洪水を繰り返す暴れ川でした。この世と黄泉"よみ"の国（死の国）との堺である聖山としてあがめられてきた剣山に流れをさえぎられて、強い雨が降るとたちまち氾濫し、田畑や家を、ついには村の人々の命までも奪い去ってしまうのでした。そんな洪水の苦しみから、村人を救うために立ち上がった一人の男がいました。日吉村で下郡"したごおり"（大庄屋）をつとめる周藤彌兵衛は洪水の元凶である岩山・剣山をくり貫き、意宇川をまっすぐに流れるようにしようと決意したのです。宝栄3年（1706年）、56歳にして一念発起した周藤彌兵衛は、剣山を切り抜く工事に取りかかりました。以来42年間、くる日もくる日も槌とノミでで岩を切り開くという苦業に立ち向かい、ついに延享4年（1747年）、97歳にして「日吉切通し」を完成させ、意宇川の流れを変えることに成功したのです。宝暦2年（1752年）周藤彌兵衛は102歳で大往生をとげました。それから240年余りの歳月が流れた今日、「日吉切通し」を流れ落ちる水音は絶えることなく、流域の人々に意宇川の恵みをもたらしています。

清原太兵衛

江戸中期、宍道湖の水害を防いだ76歳の役人

1711年(正徳元年)〜1787年(天明7年)

江戸時代の宍道湖沿岸の町や村は、度重なる水害に苦しんでいました。元禄15年（1702年）6月の大雨で、宍道湖は約2メートルも水面が高くなり、多くの人が舟で救い出されました。そして、その年の8月にも水害によって斐伊川の堤防が出雲市のあたりで破れ、8万石もの穀物が失われました。享保6年（1721年）には、大風雨で数百戸の家が流され、4万石の穀物が失われました。また次の年にも同様の被害を被ったということです。この時、農家生まれの太兵衛は10歳でした。その後松江藩の役人になった太兵衛は、数多くの苦難の中76歳で治水工事を完成させました。21世紀の我が国の社会は、高齢化が急速に進み、環境の悪化が心配されています。その予測は私たちの未来を暗く感じさせ、人々はせつな的な生き方に走りがちになります。しかし、与えられた現実を厳しく見つめ、74歳の高齢でありながら治水工事の企画と監督に命をかけた清原太兵衛の生き方は私達に大きな励ましを与えてくれます。現代の危機を嘆く前に、私たちは志高い先人の足跡に学び、未来に希望の灯を掲げる高い志を育てたいものです。

大梶七兵衛

開拓と治水に生涯をかけた

1621年(元和7年)〜1689年(元禄2年)

国譲りの神話の舞台、縁結びの地として知られる出雲地方。大梶七兵衛は、三代将軍徳川家光によって幕藩体制が確立されようとしていた1621年、出雲国神門郡古志村（島根県出雲市古志町）に生まれました。七兵衛翁は、69歳でその生涯を終えるまで、私財を投じて荒木浜開拓、高瀬川、差海川、十間川の開削等、治水の大事業に取り組み、現在に至るまで多くの人に恩恵をもたらしました。「農は国の本なり」とする幕府政策のもと、松江藩でも新田や水利の開発が積極的に行われていました。七兵衛は一農民でしたが、確かな技術の裏づけをもって偉大な構想を提言し、強いリーダーシップにより難工事をすすめました。310余年を経てなお語り継がれる翁の志は、現代日本の混迷した社会情勢のなかで、私達の心の中に鮮やかに浮かび上がるように思われます。

資料提供／㈶人間自然科学研究所 企画・制作／松江朝日広告社 （順不同）

元気・やる気・本気!
大昌株式会社
〒699-0203 松江市玉湖町布志名767-51
TEL(0852)22-2665 FAX(0852)27-1528
創造と実践の革新（樹脂私土創作グループ）
営業品目
段ボール製品・樹脂化成品の製造、販売。包装用粘着テープ、表面保護フィルム等テープ・フィルム等包装資材の販売。

制御と電子の総合商社
三光電業株式会社
松江営業所 松江市西嫁島3-5-14
TEL0852-25-6713 FAX0852-25-6710
本社・広島営業所 広島市西区商工センター5丁目11番7号
TEL(082)278-2351 FAX(082)277-5818

Tea 焼付塗装
テクノコーティング株式会社
代表取締役 竹中 健次
松江市八幡町796-32
TEL(0852)37-2719
FAX(0852)37-0624

MiC
株式会社 ミック
代表取締役社長 宮脇 和秀
松江市学園南2-10-14 タイムプラザ1F

ひとりにひとつの物語。
あなたの想いをかたちにしてみませんか?
米子プリント社が自費出版のお手伝いを致します。
オンデマンドにより1冊より印刷が可能です!
お問い合せはお気軽に 米子プリント社
〒683-0845
鳥取県米子市旗ヶ崎2218 TEL0859-22-2155
FAX. 0859-22-2157 E-mail yptutomu@bronze.ocn.ne.jp

安全衛生保護具・環境改善機器・作業服
防災防犯用品・保安用品
株式会社 松江安全
〒690-0025
島根県松江市八幡町889番地1
TEL(0852)37-0009㈹
FAX(0852)37-0000
業界異例の「製品・施工10年間品質保証」
〈ライフガードジャパン代理店〉
窓ガラスに貼る 防犯・防災・省エネ フィルム

各種電子制御機器の開発・設計・製造・販売
nippo
株式会社 ニッポー
島根工場
〒699-1822 島根県仁多郡奥出雲町下横田750-1
TEL(0854)52-0066㈹ FAX(0854)52-1142
http://www.nippo-co.com/

山陰三菱電機機器販売株式会社
松江市平成町182-35
TEL(0852)23-3333
FAX(0852)26-5038

Safety & Amenity YOSHTAN
株式会社 吉谷
〒690-0001 松江市東朝日町233-4
http://www.ystn.co.jp/ TEL 0852-23-2651㈹

川島塗料株式会社
代表取締役 川島 和男
松江市雑賀町834
TEL(0852)21-2562
FAX(0852)27-1529

周藤弥兵衛銅像

14年の歳月をかけ、出雲三兵衛がついに完成
人間自然科学研究所は周藤弥兵衛翁、清原太兵衛翁、大梶七兵衛翁の小説、児童文学、漫画、朗読テープを出版。2002年に孔子、孟子、周藤翁、清原翁の銅像を、松江六三連隊が全滅した国共合作の地、中国・山東省棗荘市台児荘で制作いたしました。それにあわせ、日中英三カ国語『論語』、北京・学苑出版社より『中日韓英四カ国語による中国古典名言録』を出版。一村一志運動を展開しています。
財団法人 人間自然科学研究所 050-3161-2490
http://www.hns.gr.jp

清原太兵衛銅像

温室効果ガス25%削減を推進
本物の時代へ シートシャッター 門番
超気密 パイプレスシートシャッターの約3倍の気密性
超耐久 シートの摩耗、破れを防止 シート非接触構造
2007.10 国土交通大臣表彰
小松電機産業株式会社

タテ割り行政からエリア行政へ
やくも yokumo Suishin 水神
水管理2.0時代のコミュニティネットワーク
全国4200施設突破
上下水道・農集施設の一元管理が可能
パソコンと携帯でどこでも監視
東京・大阪・松江 050-3161-2487
http://www.komatsuelec.co.jp

2010.11.26 山陰中央新報

韓国語版で出版された（上段左から）大梶七兵衛、清原太兵衛、周藤弥兵衛の漫画偉人伝。手前は日本語版

「出雲三兵衛」漫画 韓国語版で出版

17～18世紀に出雲地方で治水事業に取り組んだ周藤弥兵衛、清原太兵衛、大梶七兵衛の「出雲三兵衛」を描いた漫画の韓国語版が発行された。韓国語版を監修した同研究所常任顧問で元KBSプロデューサーの金顕哲（キム・ヒョンチョル）さんは「資金も技術も不十分だった時代に、地域のために尽くした精神力と実行力は、どの言語圏でも学ぶものが大きい」と話す。

出雲三兵衛の偉人伝は人間自然科学研究所（松江市）が出版したもので、韓国語版は同国の出版社・語文閣行され、同国の書店で販売されている。

周藤弥兵衛は、洪水を繰り返す意宇川の流れを変えるために現在の松江市八雲町で剣山を掘削。清原太兵衛は松江藩の役人として佐陀川の運河工事に携わり、出雲の農民だった大梶七兵衛は高瀬川開削など治水事業に取り組んだ。

韓国語版の漫画は、人物名のタイトルにそれぞれの偉業を説明する言葉を添えたほか、表紙カバーを韓国の伝統的な織物を取り入れたデザインにするなど親しみやすく工夫した。

販売は韓国内のみ。問い合わせは同研究所、電話050(3161)2490。

2010.12.27 中国新聞

出雲の治水 韓国に紹介

江戸期3偉人の漫画翻訳

松江の財団法人顧問の金さん「もっと世界にPR」

出雲地方で治水の偉人といわれる江戸時代の3人を題材にした伝記漫画を韓国に紹介するため、財団法人人間自然科学研究所（松江市）常任顧問の金顯哲（キムヒョンチョル）さん(77)が、韓国語版を企画、監修し、韓国で3冊の出版を実現させた。来日した金さんは「もっと世界に知られないといけない」とPRした。

（河野揚）

3人は周藤彌兵衛、清原太兵衛、大梶七兵衛。周藤は日吉村（現松江市八雲町）を意宇川の洪水から守るため、岩山を切り開き、「日吉切り通し」を完成させた。清原は松江市の佐陀川を開削し、大梶は出雲市の海岸を開拓した。

原作の3冊は1994～2002年に同研究所が出版した。手塚治虫の下で修業した漫画家小室孝太郎氏らが描いており、韓国版でも同じ絵を使った。

金さんは約5年前に来日した際に読んで感動し、意宇川にも訪れた。韓国に3人の偉業を広めようと、韓国語への翻訳を企画し、ソウルの出版社「語文閣」が5月に出版した。金さんは翻訳の監修も手掛けた。

金さんは韓国の文化放送（MBC）の元副放送局長。7月から同研究所常任顧問としてソウルに駐在している。「関係が悪かった時期もあるが、日韓の子どもたちが親しくなるようにさせたい」と教育現場で使われることを期待している。

漫画はいずれも180～200ページ程度。1冊9千ウォン（100ウォン＝7・5円程度）。韓国の書店で販売されており、日本では同研究所☎050（3161）2490。

漫画を手にして「3人がこのまま埋もれてはいけない」と話す金さん

出雲の治水の偉業を韓国へ

「出雲三兵衛」を韓国の新聞記者が取材

韓国国内で発行部数第四位の全国紙「国民日報」の記者が二十一日に来県、二十八日まで滞在し、大梶七兵衛、清原太兵衛、周藤弥兵衛の「出雲三兵衛」についての取材活動を行っている。

米田センター長に大梶七兵衛についての説明を受ける国民日報記者＝24日、出雲市大社町北荒木、荒木コミュニティセンターで

島根を訪れた記者は、同紙が別冊で発行している「イウッ」（隣の意味）セクションの部長をしている全正熙氏。全氏は、財団法人人間自然科学研究所（小松昭夫理事長）が発行している「漫画『治水の偉人』出雲三兵衛」シリーズの「周藤弥兵衛」、「大梶七兵衛」、「清原太兵衛」の韓国語版を読み感銘を受け、「イウッ」での特集を起案。それぞれのゆかりの土地や人物についての取材活動を進めている。

二十四日には出雲市大社町北荒木の荒木コミュニティセンターを訪れ、米田拓朗センター長から荒木地域における大梶七兵衛の事業に関する説明・解説を受けた。

取材にあたり、全さんは、「今、韓国では、政府が四大河川再生事業を推し進めており、治水に関する関心が高まっている。そうした中で、島根で治水に一生をかけた人たちを取材する機会を持てたことがうれしい。出雲三兵衛の偉業を、多くの人たちに伝えていければ」と話した。

「出雲三兵衛シリーズ」の韓国語版を手掛け、今回の取材に同行している金顯哲氏（同研究所理事）は、「出雲三兵衛のようなすばらしい方々は、世界にもなかなかいない。韓国でも特に次の世代を担う子どもたちに、彼らの偉業を知ってもらいたい」と期待を寄せた。

なお、「出雲三兵衛」についての特集は「イウッ」で計三回にわたって掲載される予定（時期は未定）。

2010年10月27日　島根日日新聞掲載

全財産をかけ干拓事業

大梶七兵衛

「4 大河川開発」問題は 2011 年にも私たちの社会の熱い問題になると思われる。 2008 年下半期に始まったこの事業（4 大河川開発）は韓国版ニューディール事業と呼ばれて漢江、洛東江、金江、栄山江、各水系で進行している。

しかし工事を始めて以後、今まで開発の正当性と効率において賛否両論に分かれ、社会が葛藤する要素になっている。宗教界、政界、市民団体、言論界を中心に舌戦を越えて物理的な衝突までもたらしている状況だ。そんな中でも昨年末、重要な部分の工程進捗率は 60% を越した。また 3 日には川岸の開発の根拠になる「親水区域法施行令」が立法予告され、河川生態系破壊や環境汚染に対する憂慮、住民の間の尖鋭な利害争いなど、この問題が私たちの社会を熱く沸き立たせるのではないかと思われる。

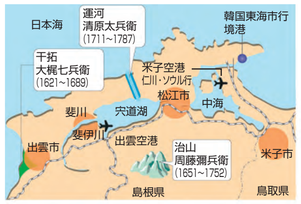
特に宗教界はカトリック、仏教、円仏教そしてプロテスタントの一部がはっきりと開発反対の声をあげていて、この問題をめぐる社会全般の内輪もめは簡単には静まらないだろう。

プロテスタントの場合 8 つの教団の協議体である韓国キリスト教教会協議会（NCCK）は事業中断を促した。その一方で、保守志向の韓国キリスト教総連合会は「長引く水問題解決と地域活性化」を理由に支持する立場を明らかにした。

これについて国民日報「イウッ（隣り）」は 17 − 18 世紀の日本における治山、治水の英雄、三人の開発事例を通じてケーススタディ（Case study）をしてみた。大梶七兵衛（1621 ～ 1689）、清原太兵衛（1711 ～ 1787）、周藤彌兵衛（1651 ～ 1752）が、その主人公である。皆、日本の島根県出身の人物でそれぞれ干拓事業、運河建設、治山治水事業に全生涯を捧げた。

これらの事例は、水害のため空を仰ぎ見て恨みながら暮らす周囲の人たちのために、犠牲をおかして開発を始めたという共通点を持っている。また明らかな開発の目的を提示し、社会的合意を導き出した上で始めたこと、また自然の流れを読む生命思想、子孫に引き継ぐ開発の執念、利益配分などで今日まで尊敬の対象になっている。

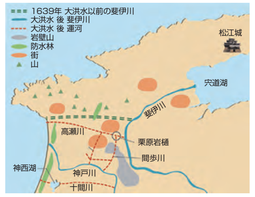
人力だけで大自然の流れを変えた事業は 200 − 300 年が過ぎた今も生態の循環を繰り返して、その功績を後代が抱きながら暮らしている。その現場を 3 回にわたって連載する。

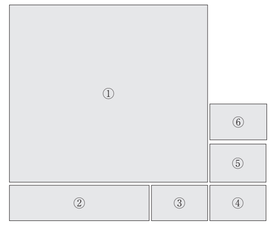


新年企画　神と自然
日本 治山治水 英雄に 道をたずねて

記事掲載順
㊤全財産をかけ干拓作業　大梶七兵衛
㊥命をかけて8km の運河をつくる　清原太兵衛
㊦42 年金づち一つで川の流れをかえる　周藤彌兵衛

大梶七兵衛　銅像





①出雲市内を通る高瀬川。かつて運河として利用したが、交通の発達によって親水の川として生まれ変わった。②山の上から眺め見る出雲平野。開発当時、運河が重要な運送手段であった。③教会の後ろから防風林を見る。④七兵衛の墓。⑤大梶七兵衛顕彰会　大野敏夫会長による説明⑥風により斜めになった松の木の防風林。

5年間木を植え、25 年間水路を掘る… 3 代が継いだ大事業

出雲（日本）＝記事　全正熙記者、
写真　尹汝弘専任記者

去る 12 月 24 日、日本の島根県出雲市ルーテル教会前。吹雪を伴った強風が姿勢を保ちにくいくらいに吹いた。東海（日本海）から吹いて来る風は、こちらの日常的な天気現象だったが、この日は特にひどかった。

ルーテル教会の後ろで、数百年を経た松の森が屏風を成していた。その森のおかげでひどい風が弱まると、同行した寺井敏夫氏（77・作家）が説明した。向かい風をかきわけて森に近寄ると、松は一斉に日本本土に向かって東側に傾いていた。ピサの斜塔の傾きだった。こちらの人はこの森を八通山と呼ぶ。大きさは丘程度だが、山と呼ぶのには理由がある。

1639 年、出雲平野を貫いて東海（日本海）に流れる斐伊川が大洪水で氾濫した。1637 年にも洪水被害を受けた出雲平野の農民たちにとっては再起不能な氾濫だった。その上に大洪水で斐伊川の流れが東海（日本海）から宍道湖に変わってしまうという信じられない事が起った（地図参照）。川の流れが変わると出雲平野は東海（日本海）から吹いて来る砂風で砂漠化が急速に進行した。田畑に使うこともできない巨大な荒れ地になってしまった。

当時この地域を治めた松江藩の領主松平直政（徳川家康の子孫）は砂漠化で税収が減少すると、農は基本と発表して農民を絞りあげた。

当時、中農だった大梶七兵衛。飢饉に苦しむ村人が、自分の家に米をもらいに来るのを見て大きな決心をするようになる。

海風、砂漠化、飢饉に悩まされつつ、粘り強く農民と会話、防風林造成、肥沃な土地に変身

「川が消えると、かなり広い土地が生じました。藩では測量をして農耕地を作ろうとしたが砂地だからあきらめてしまいました。この時、七兵衛が先導します。まさにこの防風林を造成し始めたのです。 藩は、開発は許可するが財政支援は不可能だと言いました。七兵衛は屈しないで自分についてきた農民一人と木柵を立て風を防ぎました」（寺井氏の話）

七兵衛は 5 年間、木柵を越えてくる砂と闘いながら防風林を造成した。椎の木、萩の木は砂のなかでもよく育って砂山が崩れず、助けになった。雑木の造成を終えた彼は、松の木を植え始めた。しかしいつも失敗。砂地のため水気が不足し、そのまま枯れてしまった。植樹の苗根に泥を付けて再度やり直した。

そうして 15 年。松林が鬱蒼となり、八通山の内陸の方で植物が伸び始めた。藩はやっと七兵衛を認めて大肝煎り（大庄屋）という職位を授ける。そして「特別命令 7 条」を発表して囚人などを投入、最近でいう新都市建設に出る。40 世帯で始まった移住の村はしかし、養分のない土壌のため畑作もまともにできず、住民の暴動などの危機にあう。1663 年、治安のために武士が派遣されてから安定するようになった。

藩の支援に力を得た七兵衛は、稲作のために河幅 7m の用水路建設を始める。斐伊川から東海（日本海）に抜ける用水路さえあれば、肥沃な土地になるのに時間はかからないと思われたからだ。しかし、彼が測量を始めると思いがけない壁にぶつかる。家屋と田畑を奪われる境遇に置かれるようになった農民たちが強く抵抗した。彼は長い時間をかけて、住民たちを説得し、該当する 30 の村すべてに土地所有の恩恵を与えると約束した。

「しかし砂地に堰をつくるということは不可能に思われた。今のように重装備があれば分からないですが。木で堰を造って通水するというのも難しい作業であるにもかかわらず、崩れるのは当たり前だったんです。洪水のような自然災害は致命的だったんです」寺井氏は当時の用水路図面を見せてくれながら説明した。

洪水よりもっと大きい問題は用水路に沿って水が東海（日本海）に着く前に砂地に吸収されて消えることだった。こうなると人足たちが業務を怠り、村に入って乱暴をはたらいた。また世論に大きな影響を及ぼす権力のある人は、利害の当事者である住民の側に立って工事中止を要請した。

荒木コミュニティーセンター（住民センター）米田卓朗センター長は「干拓による農地分配の約束が工事を続けるための重要な要因だった。結局、その後この約束は守られた」と言った。

七兵衛は用水吸収問題を用水路の底に、むしろ 5 万枚を敷いて、泥で覆って解決した。考えてもいなかったこの工事で彼は全財産を売って、その費用に充てた。

彼が干拓に出てから 30 余年。水路を通じて出雲平野に農業用水が供給されて沃土になった。7m 幅の用水路は事実上、運河になって日本伝統の木の船、高瀬船が運航することができた。それが高瀬川の語源となった。松江藩はこの運河ができる前、宍道湖 - 中海 - 東海（日本海）につながる航路を選んで大阪まで米輸送をした。

ひとつ七兵衛の気になることがあった。斐伊川の水を引き入れる水門が木で作られていて、堅固ではないこと。1689 年春、大雨が降った日、水門の崩壊を懸念した彼は、雨に濡れながら水門の杭を補強していて倒れてしまった。 運命の日の直前、彼は息子、朝定に再設計図を譲って生涯を終える。

子孫が 430 m の岩樋を完工、鉄道などの発達で運河機能は衰えたものの、水遊び、魚釣りが市民の自慢

しかし、朝定はその年の秋に失踪してしまった。藩の官吏だった彼がどうして失踪したのかは分からないが、法を破って処刑されたという説が今まで伝えられている。このために七兵衛の家門は干拓の功績によって受領した田畑をすべて奪われてしまった。そんな中でも七兵衛の妻マツと嫁のサダは朝則が祖父の遺業を継承するようにした。そして 1712 年、ついに 430m に達する閘門式栗原岩樋が完工する。この閘門式水路はパナマ運河の閘門式より 200 余年前に作られたものだ。

22 日出雲市内、高瀬川。出雲市都市計画調査監の岸和之氏が建設省から受けた「生活河川 30 選」受賞記念碑の前で高瀬川の歴史を説明した。

「砂漠化された出雲平野で稲作をすることができたのは、まさに高瀬川のおかげです。人力だけで成した大事業で、その長さが 8km です。今も親水環境として利用される市民の自慢です」

市会議員・珍部全吾氏にとっても、中心部を流れる高瀬川に対する自負心は大きいものであった。子供たちは水遊びと魚捕り、大人たちは川辺で祭りをし、また花火なども楽しむと言った。

19−20 世紀には蚕業、染色業、瓦工場の用水路としても使われた。当時木造住宅が多く、防火用水としても大きな役目を果たした。東海（日本海）と触れる河口では鳥類観察、及び湿地探査の空間にも活用される。七兵衛の子孫が開発した間伏川、妙仙寺川、十間川、差海川なども近代以後、類似した機能を発揮している。

七兵衛の干拓後 300 余年。人口 14 万人余の出雲市は、松江市とともに水の都市になった。あちこちに幅 4−7m の水路が親水環境を作り出す美しい都市になった。都市が経済力を持った場合、親水環境が維持されていないと、19 世紀末、20 世紀初めのように工業用水のための河川として使われてしまう。

しかし、海上運送の革命的役目を果たした運河の機能は、鉄道と地上の運送手段の発達により、1 世紀を経て衰えてしまった。4 大江の運河の議論に参考となるところである。

25 日午後、またルーテル教会前。七兵衛の一族が建設した 3 箇所の防風林は市民の風よけになっている。防風林がなかったら都市は本来の機能を失うだろう。

2000 年、33.9kmのセマングム防潮堤が完工した後、セマングム干拓地は飛散するほこりとの戦いの真っ最中と伝えられる。干潟が乾燥すると、潮風によりほこりが飛ぶからだ。このほこりは果実と木の葉に付着して成長に障害を与える。韓国農漁村公社は（高塩濃度に耐える）塩生植物を植えて対策を立てていると言うが、根本的な解決策ではないようだ。出雲干拓以後 300 年間の変化は、セマングム干拓地にとって良い教科書となることを意味する。

七兵衛は 5 年間木を植えながら、25 年間用水路工事をした。また 3 代にわたって生態の変化を見つめて、自然を克服した。建設機器の発達は、七兵衛の 30 年の開発を一気に 1 年に短縮することができる。しかしその開発された自然は、当代の私たちだけが生きて行く基盤ではないということだ。生態の循環を見守って少しずつ開発して行くということだ。

取材支援：
日本財団法人人間自然科学研究所
翻訳　金有辰
監修　財団法人人間自然科学研究所

（財）人間自然科学研究所、国民日報趙旻濟社長に感謝状

国民日報 趙旻濟（チョミンジェ、写真中央）代表取締役社長が、日本人間自然科学研究所小松昭夫（66・左側）理事長から、自然開発報道に関して感謝状を受けた。

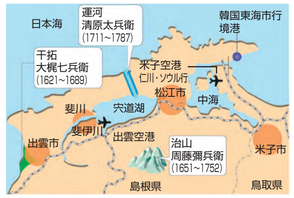
小松理事長は 16 日ソウル・汝矣島の国民日報ビル 11 階で開かれた“国民家族”の水曜礼拝に参加して、趙旻濟社長に国民日報セクション・イウッ（隣り）が去る 1 月、日本島根半島の治山治水の英雄三人の業績に対して、「『神と自然』という観点で報道してくださったことを光栄に思う」と、感謝状を授与した。授与式には人間自然科研究所の金顕哲（キムヒョンチョル、78・前放送委員会企画室長）顧問が同席した。

去る 1 月 6 日，13 日，20 日の 3 回にわたって報道された企画‘神と自然’は、論議を起こしている 4 大河川開発問題に対して「創造」「秩序」「視覚」で解答を求めようと日本島根県（出雲）で取材が行われ、人間自然科学研究所が取材を支援した。日本治山治水の英雄 3 人は運河、干拓などの開発事業を国民として推進した。この報道は彼らによる開発から 300 年あまりを経て、自然環境に及ぼした長所短所を集中報道した。

チョ・グッヒョン記者

命をかけて8km の運河をつくる

清原太兵衛



新年企画　神と自然
日本 治山治水 英雄に 道をたずねて

4大江開発事業に対して 8つの教団協議体である韓国キリスト教教会協議会(NCCK)は事業中断を促した。その一方で、保守志向の韓国キリスト教総連合会は「長引く水問題の解決と地域活性化」を理由に支持する立場を明らかにした。これについて国民日報「イウッ（隣り）」は 17 − 18 世紀の日本における治山、治水の英雄、三人の開発事例を通じてケーススタディ（Case study）をしてみた。

人力だけで大自然の流れを変えた事業は 200 − 300 年が過ぎた今も生態の循環を繰り返して、その功績を後代が抱きながら暮らしている。その現場を 3 回にわたって連載する。

記事掲載順
㊤全財産をかけ干拓作業　大梶七兵衛
㊥命をかけて8km の運河をつくる　清原太兵衛
㊦ 42 年間金づち一つで川の流れをかえる　周藤彌兵衛

住民、藩、寺社…利害が複雑にからみあう難題を克服、歴史的大事業を達成

清原太兵衛　銅像

出雲(日本)＝記事　全正熙記者、
写真　尹汝弘専任記者

日本の島根県、島根半島の佐陀川が開通してから今年で 223 年目だ。私たちの東海（日本海）に面している佐陀川は、日本幕府時代の一つの藩の治水の歴史であるといえる。18 世紀後半のその普請は土木・建設技術が当時とは格段に差がある現代と、単純に比較することは不可能といえるかもしれない。だが、自然は、開発後にも後代が子子孫孫に受け継いで、生の基盤にするという点で「その後 200 余年」はケーススタディ（Case study）とするのに十分値する。

聖書で神様は地を人格化してその創造力を地に委任（窓 1：12）した。生態秩序の観点で見ると、地は生産と生命の主体だ。しかし技術文明の発展は気候温暖化と生態秩序の攪乱を生じた。「種を実らす植物と、実を作る木」は人間の生命維持のための神様の思いやりであるが、これを地を通じてどのようにうまく治めるのかが地球共同体の重要な課題になった。

ここに世界キリスト教は人間救援中心の神学から、生態系全体を救援の対象と見るパラダイムの転換をはかった。クリスチャンだけではなく他の宗教人でさえ 4 大江開発に対して深く悩むことは、人間と自然の間にある「宿題」のためである。

流浪の民のために先頭に立つ

佐陀川の開発過程は、官、農民、宗教界などが関わる難題を、どのように賢く克服するかという点に注目する必要がある。専制の時代と言っても農民の意に頑なにあらがうことはできなかったし、宗教界が自然破壊を見る目に背を向けることもできなかった。また官の内部でも事業の妥当性は共有するが、実際に実務に入って行けば予算と構成員間のパワーゲームで、目的を果たすことが簡単ではなくなった。

清原太兵衛（1711―1787）は日本戦国時代の名将徳川家康のように、「鳴かない鳥を、鳴くまで忍耐して」運河を開発した。10 代の時から洪水被害のために流浪乞食をする農民の惨めな現実を見ながら、治水の意志を固めた。そして 76 歳で運河開通を目前にして死んだ。彼が完工した運河の長さは 8 ｋｍ、幅は 36m だ。

洪水被害で、流浪の民となった農民を目撃し、10 代の時に治水の意志を固め…70 代で実践、工員 7 万人、3 年で完工

先般のクリスマスの日、東海（日本海）が広がる日本、松江市の恵曇港。内陸の宍道湖から流れ出た川水が海につながる小さな港だ。荒々しい吹雪と強風で姿勢を保つのも大変だった。運河に停泊したヨットも揺れる。よく整備された堰に沿って上流に続く運河筋は、今は穏やかな川水を湛えるだけだ。

しかし当時のこの運河は、出雲平野で生産された米を大都市である大阪、江戸などへ運送した重要な水運路だった。

「江戸時代、海岸線に沿って移動する北前船がありました。出雲平野の米も北前船を通じて大阪、江戸、北海道などに運送されました。佐陀川が出来てこの運送船が島根半島の内陸に深く入りこんで行くことになり、物流革命をもたらすようになったのですね。18 世紀は水運手段が一番効果的だったのです」

出雲地方の歴史家である佐々木武男氏が堰に沿って歩きながら説明した。運河が開発される前には、船は右側にある島根半島の海岸線に沿って行き境港港（上端地図参照）を経て中海と宍道湖に入らなければならなかった。この運送路の長さがおよそ 100Km。佐陀川が完工してそれが 10 分の 1 になった。

しかし当時、出雲の農民にとっては運河が切迫した問題ではなかった。大雨が降ると穀倉地帯が水に浸ってしまう洪水が直面する現実だった。

財政を理由に、治水から目をそらす藩

1639 年の大洪水。全財産をはたいて干拓事業をした大梶七兵衛が 18 歳の時に経験した水騒動だった。洪水直後の松江藩は天神川を造って治水に力を尽くしたが、水害を防ぐには力不足だった。険しい谷に沿って水が一斉に宍道湖に流れ込めば一瞬にして平地が水に浸った。平野はもちろん、市街地も例外ではなかった。

清原太兵衛は農家の息子だった。武士的な気質を備えたうえに聡明だった。彼は 10 歳の頃、偶然に松江藩の武士、青沼六郎左衛門という人物に会い、物のことわりが分かるようになる。今で言うと国家試験にあたるが、それを目標にした夢を持つようになる。彼はその末端の武士となる夢を 15 歳で成し遂げる。

1721 年と 22 年、洪水で宍道湖があふれて流民が発生する。下級藩士になった彼は農民のために何とか解決しようと決心する。青沼に「どうして藩は洪水が起こらないようにしないのか」と問い詰めるような唐突な面もある人物でもあった。

1732 年、日本列島を強打した自然災害は食糧難をもたらした。島根半島もやはり大洪水で廃墟になった。泣き面に蜂でイナゴの大群の被害もあって、日本全国で数十万名の餓死者が発生した。この時、飢餓に苦しむ人々が土まで食べたという記録もある。

青年太兵衛は、宍道湖の水位を下げれば洪水被害を防ぐことができると考えた。水利施設工事で農民を助けることができると確信するようになる。しかし父と後見人青沼が死ぬと治水の夢が難しくなる。彼に公僕としての意味を教えたのは彼の母だ。長男だった彼が家業を引き継がないことに落胆せずに、「宍道湖の洪水を必ず防いでほしい」と励ました。

太兵衛は藩の公僕として、出世すれば治水事業ができると思った。そして 47 歳にして刀を腰にさして道を歩くことができる正式な武士になり、10 年後、治安担当、行事管理担当、人事担当、監査担当などをするようになる。

「1784 年の洪水は松江城の下まで水位が上がってくる脅威的なものでした。財政を理由にして関心を持たずにいた藩の役人たちが、その時になってようやく気づいて太兵衛の運河提案を受け入れます。10 代の時の計画が 70 代になってようやく実践する機会ができたのです」

当時は米生産増加など利益を創出した佐陀川。開通から 223 年、運河としては使われないが、ヨットハーバーが賑わう

佐々木武男氏によると「洪水で食べ物がないのに米で税収を集めて来た藩の硬直性からみても分かるように、太兵衛の提案も領主らにとって、即座に必要ではないので黙殺されていた」というのだ。そのうえ太兵衛を牽制しようとする政治勢力は、直近の 10 年あまり洪水被害がないという点をあげて、昇進に次ぐ昇進でスピード出世した彼を阻害した。

この頃、代を引き継いだ若い城主、治郷が藩の治水の無対策を叱ると、実権を握っていた反対派が仕方なく太兵衛に謁見させた。苛酷な税金などによる農民反乱がその背景にあった。

藩主は「金になる河川開発」と見た

太兵衛は城主に多久川と忠太夫川の源流を貫通して運河を造ることを提案する。まるで洛東江と漢江を連結して運河を造ることと同じ脈絡だ。洪水被害予防、沼地干拓、旅客輸送、農産物及び海産物運送のような多目的な開発だった。藩がどんな犠牲を払ってでも工事をしなければならないというのが太兵衛の考えだった。工期 3 年、作業者は年間人員 7 万人、賃銭米 1 万 6000 俵。犠牲を覚悟した太兵衛と、城主とでは計算が違った。運河を開発して船に通行料をとることで、藩の永久的収入になるということが明確になると全面支援に出た。国の公共事業の本当の意図が現われたわけだ。

太兵衛が 73 歳になった年に工事が始まった。10 箇所の村にわたって土地収容が発生し、当然農民が反発した。工事現場に垣根をつくったが、農民がいつも取り除いてしまう。上司の命令服従に厳しい日本の幕府時代を考えれば、その反発がどのようなものであるか分かるだろう。農民たちは田で保証すると言っても、信じられないと言った。

太兵衛はそこで正面から対立しない。夜に密かに垣根づくりと測量工事に出て仕事を進行した。沼地に夜にだけ出てくる蟹を今日「太兵衛蟹」と呼ぶのはそのためだ。太兵衛が超えなければならない他の難題は宗教界だった。佐太神社が反対した。神社正門前に運河があったからだ。その上、身を清めるという池「身澄ヶ池（みすみがいけ）」が開発事業で乾くことになったので、正面衝突するしかなかった。

この日に会った佐太神社の宮司、朝山芳圀氏（79）が話した。

「宗教との摩擦はその解決が簡単なものではないです。太兵衛の場合、神社を数百回訪ねて来て、農民のための開発であることを強調して 聖所『身澄ヶ池』の代わりとなる所をつくり誠意を尽くしたのですよ。事業の正当性と誠意が優って、神社が譲歩したといいます」

太兵衛はまた寺への説得のために毎日、海辺で身を洗って寺まで 2Km を歩き祈りを捧げた。

寺井敏夫氏（作家）は「18 世紀末、土木技術で沼地に運河を建設するのは不可能な事だったが、失敗を繰り返して技術の蓄積をしていったから、成功することができた」と話した。

佐陀川（運河）はそれで完工した。数十人の人足が沼地工事過程で死に、開通直前に太兵衛も、一生を終えた。

26 日、再び見た佐太川の一帯。運河は機能を失ってから長い。韓国の地方もそうであるように、こちらも親水環境を造成しても人口減少で利用する人がいない。ヨット繋留場くらいが活気があるだけだ。

200 余年前、今のように生態系問題は考慮されなかったはずだ。ただ米増産と治水が目標だった。佐陀川は当代に利益を創出した。

しかし移山移水が可能な現代の人工自然は、国家が管理能力を喪失する時、再び凶悪な面を現し、災難をもたらす可能性も考えなければならないだろう。

jhjeon@kmib.co.kr

①佐陀川の河口。左右に漁船が並んでいる。②運河に使われなくなり、ヨット場に活用されている。③宍道湖の夕日 ④松江城⑤かつて氾濫した宍道湖の今日。

取材支援：
日本財団法人人間自然科学研究所
翻訳　金有辰
監修　財団法人人間自然科学研究所

（財）人間自然科学研究所、国民日報趙旻濟社長に感謝状

国民日報 趙旻濟（チョミンジェ、写真中央）代表取締役社長が、日本人間自然科学研究所小松昭夫(66・左側）理事長から、自然開発報道に関して感謝状を受けた。

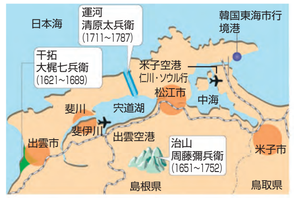
小松理事長は 16 日ソウル・汝矣島の国民日報ビル 11 階で開かれた“国民家族”の水曜礼拝に参加して、趙旻濟社長に国民日報セクション・イウッ（隣り）が去る 1 月、日本島根半島の治山治水の英雄三人の業績に対して、「『神と自然』という観点で報道してくださったことを光栄に思う」と、感謝状を授与した。 授与式には人間自然科研究所の金顕哲（キムヒョンチョル、78・前放送委員会企画室長）顧問が同席した。

去る 1 月 6 日，13 日，20 日の 3 回にわたって報道された企画‘神と自然’は、論議を起こしている 4 大河川開発問題に対して「創造」「秩序」「視覚」で解答を求めようと日本島根県（出雲）で取材が行われ、人間自然科学研究所が取材を支援した。日本治山治水の英雄 3 人は運河、干拓などの開発事業を国民として推進した。この報道は彼らによる開発から 300 年あまりを経て、自然環境に及ぼした長所短所を集中報道した。

チョ・グッヒョン記者

42 年間 金づち一つで川の流れをかえる

周藤彌兵衛



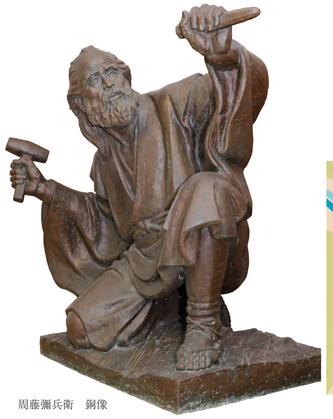
新年企画　神と自然
日本 治山治水 英雄に 道をたずねて

記事掲載順
㊤全財産をかけ干拓作業　大梶七兵衛
㊥命をかけて８km の運河をつくる　清原太兵衛
㊦ 42 年間金づち一つで川の流れをかえる　周藤彌兵衛

４大江開発事業に対して８つの教団協議体である韓国キリスト教教会協議会(NCCK)は事業中断を促した。その一方で、保守志向の韓国キリスト教総連合会は「長引く水問題の解決と地域活性化」を理由に支持する立場を明らかにした。これについて国民日報「イウッ（隣り）」は 17 － 18 世紀の日本における治山、治水の英雄、３人の開発事例を通じてケーススタディ (Case study) をしてみた。

人力だけで大自然の流れを変えた事業は、200 － 300 年が過ぎた今も生態の循環を繰り返して、その功績を後代が抱きながら暮らしている。

人間の知恵は大自然といっしょに生きて行くために使う



周藤彌兵衛　銅像

出雲（日本）＝記事　全正熙記者、
写真　尹汝弘専任記者

「人間は知恵を使って大自然といっしょに生きて行かなければならない。自然を相手に悪い事を企てて害になればそれが災いだ」

周藤彌兵衛（1651―1752）。42 年の間、槌とのみだけで山を切開して川の流れを変え、洪水被害から農民を救った日本松江藩の官吏。彼は 1705 年１月のある日、治水工事を控えて、息子勘六を呼んでこのように言う。江戸時代、世襲の郡の家柄に過ぎない低い位の彼は、祖父が失敗した歴史に跳び込んだのだ。50 代半ばの彼は息子に、「山を移して川を変える」という無謀な夢を話した。

息子は精霊崇拝をする村の人々の指弾（つまはじき）が恐ろしかった。亀の首のような形をしていた剣山（つるぎ山）にまつられている竜神を畏れない父を心配した。彌兵衛は亀の頭の前で蛇行する川を、直線化しようと考えた。それには、首部分を切開しなければならない。頭部分に鎮座する神社の反対は、火を見るよりも明らかだった。

先月 23 日に訪れた松江市の日吉切通し（山などを切った道路や水路）には、美しい谷が目の前に広がっていた。水泳や釣り、またはリフティングをしても良い、素晴らしい谷だった。

この切通しは、治山治水のために開発者がどんな姿勢を持つべきかを示している、開発哲学の遺産が込められた所だ。周藤彌兵衛顕彰会の石原茂会長（82）の話。

「彼は村の豪農でした。権力者ではないが、地方の末端の公職者として楽に一生を終えることができたんです。ところが彼の胸の中には、梅雨や台風が来たといえば家と農地が押し流される農民の現実を、なんとしても克服したいという意志がありました。のみと槌で山を切り開くということを、当時、誰ができると考えたでしょう。 彼は農民のために家族と財産をすべて捧げた人です」

川筋は剣山に沿って瓶の首「⊃」の形を描く、台風でも来れば人命被害と農地流失、山を貫き岸壁を切り開いて、堤防築造に挑戦

彌兵衛の生まれた所は、前回掲載した大梶七兵衛、清原太兵衛とは違い山村に近い。険しい山の間につくられた田畑で食べる村が、意宇川を中心に点々と 70 箇所余りあった。意宇川は天狗山を源流として中海に流れ込む長さ 20Km の川だ。

この川は、日吉村の剣山の岩壁に当たり「⊃」模様で迂回して流れる。普段は、いろいろなところの水を集めて、村ごとに豊かな農業用水を供給する乳腺の役目をした。

1702 年 8 月、出雲地方に台風が近づいた。あっという間に川の水かさは増え、河口に押し寄せる満潮まで重なり、日吉村周辺の堤防が崩れた。何よりも水の流れが、瓶の首のような剣山に当たり、抜ける所を失ったことが原因だった。数百人が死んで、家 4000 軒が失われた。田は砂と泥で覆われた。翌年も同じだった。彌兵衛はこの時を「希望の光が見えない地獄の様」と言った。松江藩は地平し米（救援米）を送ったが、全く足りなかった。下郡だった彌兵衛はこの大洪水を経験し、どんなことがあっても治山治水をすると決心する。

彼のこのような決心には根拠があった。1650 年代、彼の祖父周藤彌兵衛家正が下郡をした時も４回も洪水がおこり、村が荒廃した。この時、家正は意宇川の流れを変えることだけが生き延びる方法だと確信した。

小説「周藤彌兵衛」の著者、交易場修氏は「彼の祖父は村会議を召集して『日吉水路工事』を請願したという記録がある」と、「1650 年、藩の支援を受けた家正は３年間にわたって土木工事を始めた」と話した。

この時、剣山の亀の首の、第１次切開が行われた。高さと幅はそれぞれ 12.7m、長さ 29m に至る難工事だった。剣山は硬い花崗岩（花崗閃緑岩）なので、藩の大規模支援があっても３年もかかった。

しかし喜びもつかの間、1654 年の洪水に、直線化した堤防はあっという間に崩れた。12.7m の狭い幅の切通しでは力不足だった。農地が 2.5 倍も増えたと喜んでいた農民は、竜神の災いと言って動揺した。以後も３回にわたって洪水が襲った。当座の暮らしにも困ったため村の娘たちが売られた。それに土木工事を支援した力強い領主、松平直政 (徳川家康の孫) までもが死んだ。

彌兵衛は祖父が残した水路工事計画書だけでは足りないと思い、直接、堤防工事を経験しようと心に決めた。ちょうど大阪の大和川で大きな土木工事があることを知り、松江地方から派遣された人夫を引率して大阪に旅立った。1704 年の事だった。

彼はそこで８ヶ月にわたって土木技術を詳しく習った後、藩に支援を要請したが、出費がかさんでいた藩は断った。

「ここが彌兵衛の家の跡地です。彼は 1706 年、財産をはたいて工事を始めます。10 年かかるか、30 年かかるか、誰も分からない事でした。村人は『途方もない工事』と、すぐに背を向けたんです。お金をあげて『工事に参加しなさい』と言っても、『祟りがある』とそっぽを向きました」

山本謙氏（人間自然科学研究所理事・市民運動家）は、彌兵衛の執念が泰山を動かしたと言った。彌兵衛は村人がそっぽを向いた中で、他の地方の人 20 人余りと一緒に工事を始めた。祖父が切った岩をさらに切り広げ、新川の堤防を造る工事だった。

彼は工事のために倉の米をみな処分し、賃金を払った。しかしまた人夫たちも、堤防築造工事のみで、岩を壊して水路を造る事には参加しなかった。竜神の祟りが恐ろしかったからだ。彌兵衛は仕方なく一人で岩に上がって、槌とのみだけで岩を壊した。雪や雨が降っても、一人作業を止めなかった。そうして３年、彌兵衛の真心に感服した日吉の村人たちが彼の作業を助け始めた。また、藩の関係者も実態を把握して激励金を出したため、工事に弾みがついた。そして着工してから５年、その間放置されていた第２次水路工事が完了した。

それでも彌兵衛の槌音は止まらなかった。幅 6m、深さ 1m の拡張では、もっと掘らないと大洪水を十分に防げるとは判断できなかった。すべての農民が帰っても、彼は一人ぽつんと足場の上で岩を壊した。

そして悲劇がおこった。結婚もしてない娘が持病で死んでしまった。人々は竜神の災いだとまたうわさした。62 歳で仏門に入ったのも、そんなうわさを無くしたいという理由からだ。

住民は参加、藩は支援拒絶、倉の米全てを処分して人夫の給金に 97 歳の偉大な事業が完工…後世に豊穣の恩恵

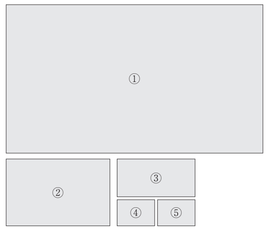
いつのまにか、また 10 余年が経った。その間大雨がなく、村は毎年豊作だった。息子は父の健康のために程々にするよう勧めたが、父は聞かなかった。ある日、父を助けるつもりで岩を壊していた息子勘六が突然血を吐いて死んでしまう。傷心の妻も同じ年に寝込んで、再び起きることができなかった。また３年後、幼い息子平佐衛門も急死した。代が途絶えてしまったのだ。 本当に竜神の災いの様だった。

それなのに白髪の老人の槌音は続いた。そして遂に 1747 年、工事が完了した。彼は 97 歳になっていた。海の中に川を掘るような不可能な事が、40 余年の槌打ちの末に完成した。

（監注：日吉切通しの幅は上流部で約 27.3 m、下流部で約 21.8 m）

家族を失い、財産を捧げ、人生を捧げた大いなる歴史だった。農民が大自然と共に豊かに暮らすことができるようにしたのだ。堤防の小さな穴に指を入れて洪水を防いだという、オランダの少年英雄ハンスブリンコの老年版のようだ。

先月 26 日午後、関係者たちは取材陣を、切通しからちょっと離れた、ある畑に案内した。 畑に韓国産白菜が生き生きと育っていた。その横の一つの小さな丘が目を引いた。1650 年、彌兵衛の祖父が松江藩の支援をもらって築造した堤防の一部が、土木遺産になって今も残っていた。松江市歴史資料館整備室関係者は、「現存する堤防遺跡は幅 10m、高さ 3m、長さ 50m で、小さな石を積んでいるもの」と明らかにした。



①彌兵衛が 42 年間金づちとのみで花崗閃緑岩の間を打ちつけた。今は意宇川が流れている。②周藤彌兵衛顕彰会石原茂会長。③昔の意宇川堤防の一部。④神魂神社。⑤彌兵衛墓地。

彌兵衛の生涯は 102 歳まで長生きした。彼の家の跡地などは、切通しから 2 － 3km の範囲内に位置し、遺跡地として後代の生きた教育の場として活用されている。時にはモーゼのようなリーダーシップを発揮し、時には住民との葛藤もあり、天を仰いだ彌兵衛。自然と向かい合った彼の犠牲は、今に至るまで民に豊饒をもたらしてくれている。

エピローグ

日本の治山治水の英雄３人には共通点がある。第一に隣人のための開発精神、二番目に自己犠牲、三番目に開発によってもたらされる利益を望まないこと、四番目に自然に対する敬意、五番目に社会的合意だ。当時、創造世界の保全のような、生命神学の観点の認識はなかった。

現代の土木技術は 42 年の槌打ちで乗り越えた自然を、たった一日で、ショベルカーを使って崩すことができる。現代人にとって自然は敬意の対象ではなく、生活の利便性や建設利益のために、いつでも変えることができるという征服的自然観が支配的だ。

しかし、クリスチャンにとって土地は生命を育む「母」だ。したがって、これを虐待する行為は創造秩序に対する挑戦だ。地球温暖化に代表される災いは、この挑戦に対する当たり前の結果かも知れない。

私たちの４大江開発事業の可否の判断は、正確さを求めるならば専門家たちの役割だ。全知全能でない我々が母なる河を治めることによる環境工学的結果、社会的価値は一般人には簡単には分からないし、判断することもできないからだ.

セマングム干拓地開発 19 年を通じて分かるように、開発論者と反対論者が押したり引いたりして、先進的な循環ができる結果を生んだ。社会的合意がついたということだ。ところがその最終的な結果はまだ分からない。日本の運河開発事例のように無用の長物になりうる。その一方、治水は干拓のような肯定的効果をもたらすこともできる。

このような観点で見る時、熾烈な論争にもかかわらず、そのまま速いスピードで進む４大江開発事業は、プロテスタントの判断のように議論の余地があることは明らかだ。時間をおいて特定の港湾をまず開発して、生態系を観察するケーススタディが必要だ。聖書的観点で見る時、生態系全体が救援の対象だからだ。

jhjeon@kmib.co.kr

取材支援：
日本財団法人人間自然科学研究所
翻訳　金有辰
監修　財団法人人間自然科学研究所

（財）人間自然科学研究所、国民日報趙旻濟社長に感謝状

国民日報 趙旻濟（チョミンジェ、写真中央）代表取締役社長が、日本人間自然科学研究所小松昭夫（66・左側）理事長から、自然開発報道に関して感謝状を受けた。

小松理事長は 16 日ソウル・汝矣島の国民日報ビル 11 階で開かれた“国民家族”の水曜礼拝に参加して、趙旻濟社長に国民日報セクション・イウッ（隣り）が去る１月、日本島根半島の治山治水の英雄三人の業績に対して、「『神と自然』という観点で報道してくださったことを光栄に思う」と、感謝状を授与した。 授与式には人間自然科研究所の金顕哲（キムヒョンチョル、78・前放送委員会企画室長）顧問が同席した。

去る１月６日，13 日，20 日の３回にわたって報道された企画‘神と自然’は、論議を起こしている４大河川開発問題に対して「創造」「秩序」「視覚」で解答を求めようと日本島根県（出雲）で取材が行われ、人間自然科学研究所が取材を支援した。日本治山治水の英雄３人は運河、干拓などの開発事業を国民として推進した。この報道は彼らによる開発から 300 年あまりを経て、自然環境に及ぼした長所短所を集中報道した。

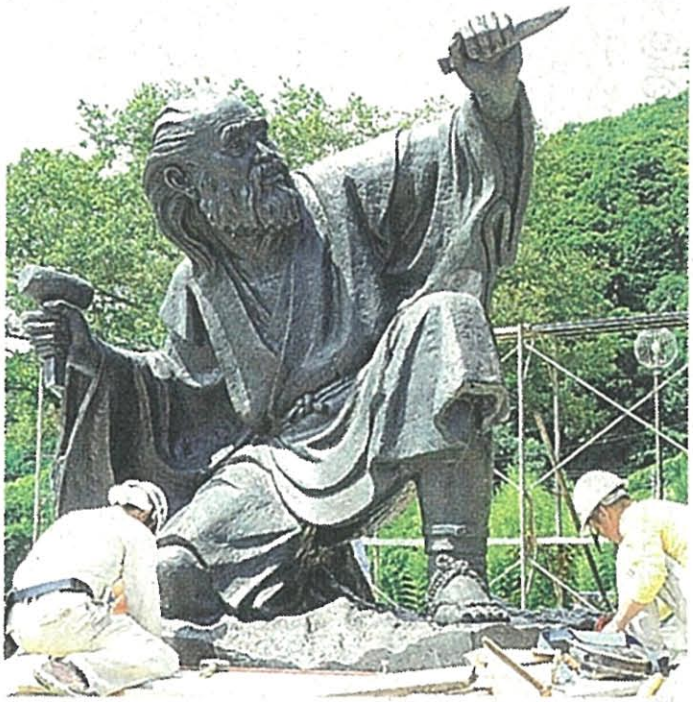
チョ・グッヒョン記者

2014.7.30 山陰中央新報

周藤弥兵衛の銅像建立

松江の研究所 1日に除幕式

松江市八雲町を流れる意宇川を江戸時代に開削した周藤弥兵衛（1651～1752年）の銅像が、同市八雲町日吉の意宇川沿いの日吉公園に建てられ、8月1日に除幕式がある。財団法人・人間自然科学研究所（松江市乃木福富町、小松電機産業内）が制作し、八雲町の周藤弥兵衛顕彰会に寄贈した。



周藤弥兵衛の銅像を設置する作業員

弥兵衛は、岩山に阻まれた意宇川の氾濫に悩まされていた村のために、56歳から97歳まで40年余をかけて岩山に切り通しを設けて川の流れを変え、水害を減らした。同研究所は、伝記を出版するなど、弥兵衛の顕彰活動を続けている。

銅像は高さ2・65㍍、幅2・8㍍、奥行き1・7㍍で、のみとつちを手に岩山を開削する姿を表現している。中国で制作。本年度施行の水循環基本法で「水の日」に定められた8月1日に除幕することにした。

研究所の小松昭夫理事長(70)は「人々のため立ち上がった周藤弥兵衛の志を現代によみがえらせ、地域の発展につなげたい」と思いを語り、顕彰会の矢野秀行会長(60)は「偉人の功績を広く知ってもらい、公園が良き交流の場になるよう活用したい」と話した。

2014.8.1 中国新聞

江戸時代 私財投じ八雲の治水に尽力

弥兵衛の偉業たたえ銅像

親水公園近くきょう除幕

地元企業が贈与

江戸時代、松江市八雲町の治水に生涯をかけた周藤弥兵衛（1651～1752年）の銅像が、同町の日吉親水公園近くに設けられ、1日に除幕式がある。

（松島岳人）

周藤弥兵衛の銅像を見詰める矢野会長

弥兵衛は、1706年から42年間かけ、意宇川の洪水から同町日吉地区を救うため、私財を投じてのみとつちを振るい、岩山を切り開いて川の流れを変えた。「日吉切通し」と名付けられ、今ものみの跡が残る。

銅像は、高さ2・65㍍、重さ1・3㌧。飯南町出身の画家、故高田勲さんのイラストを基に、のみとつちを手に開削する弥兵衛を表現した。

八雲町出身でシャッターなどを製造する小松電機産業（同市乃木福富町）の小松昭夫社長(70)が制作を決め、同社が約1500万円かけて中国山東省の工房で制作、日本へ輸送した。除幕式で周藤弥兵衛顕彰会（矢野秀行会長、20人）に贈る。

約20年前から出版や講演会で弥兵衛を国内外に紹介する活動を続けている小松社長は「100歳近くまで働いた弥兵衛は、高齢化が進む現在でも通用する人物。故郷の偉人を多くの人に知ってもらいたい」と話している。

銅像は7月28日に高さ2㍍の台座に設置された。矢野会長(60)は「地域の住民を思いやる優しさと、困難な事業をやり遂げた意思の強さが表現できている」と喜んでいる。

2014.8.2 山陰中央新報

町おこしに生かしたい

周藤弥兵衛銅像の除幕式

松江・八雲

周藤弥兵衛の銅像を除幕する関係者

松江市八雲町を流れる意宇川を江戸時代に開削した周藤弥兵衛（1651～1752年）の功績をたたえる銅像の除幕式が1日、同市八雲町日吉の意宇川沿いであり、関係者や住民約170人が祝った。

銅像は高さ2・65㍍、幅2・8㍍で、意宇川をふさいでいた岩山をのみとつちで開削する姿を表現している。財団法人・人間自然科学研究所（小松昭夫理事長、松江市乃木福富町、小松電機産業内）が制作し、地元の周藤弥兵衛顕彰会（矢野秀行会長）に寄贈した。

「水の日」に合わせて除幕式を行い、矢野会長(60)が「人々のにぎわいと町おこしに生かしたい」と謝辞。小松理事長(70)は「八雲の地から平和に向けた新しい流れを生み出したい」と述べた。この後、2人や地元の保育園児らが除幕すると、参加者から大きな歓声が上がった。

銅像は現在、仮設置されており、今後、別の場所に置く計画。

2014.8.2 毎日新聞

弥兵衛の銅像完成

松江で除幕式 治水に尽力

江戸時代、日吉村（現・松江市八雲町日吉）を洪水の被害から守るため、治水に尽力した周藤弥兵衛（1651～1752年）の銅像が完成し、1日に日吉親水公園（松江市八雲町日吉）で除幕式があった。

披露された周藤弥兵衛の銅像＝松江市八雲町日吉で

弥兵衛は松江藩の官吏で、意宇川の水害に悩まされてきた村を守るため、56歳の時、のみとつちだけで岩山を切り開き始めた。私財も投じ、42年間かけて川の流れを変え、村を救った。今でも現場にはのみの跡が残り、「切通し」と名付けられ、多くの市民に親しまれている。

銅像は高さ2・65メートル、重さ1・3トン。郷土の偉人を顕彰する出版活動などを続けてきた「小松電気産業」（松江市乃木福富町）の小松昭夫社長が制作を決断した。飯南町出身の画家、故高田勲さんのイラストを基に、のみとつちを持ち、躍動感あふれる弥兵衛の像となった。

この日の式典には、地元や関係者ら約120人が出席。小松社長から、地元で弥兵衛を紹介する活動などに取り組む「周藤弥兵衛顕彰会」（約40人）の矢野秀行会長に銅像が贈られた。

矢野会長は「（銅像建立は）長年の願いだった。素晴らしい偉業をたくさんの人に知ってもらいたい」と話した。小松社長も「ここが平和と水の聖地になってほしい」と語った。

【長宗拓弥】

2014.8.3 島根日日新聞

“治水の偉人”の銅像が完成

周藤彌兵衛顕彰会が除幕式

松江

松江市乃木福富町の小松電機産業株式会社（小松昭夫社長）が、同市八雲町で切り通しを開削した治水の偉人、周藤彌兵衛の銅像を作り、周藤彌兵衛顕彰会（矢野秀行会長、38人）に寄贈した。銅像は同町の日吉親水公園内の民有地に設置され、1日に除幕式が行われた。

小松電機産業が寄贈

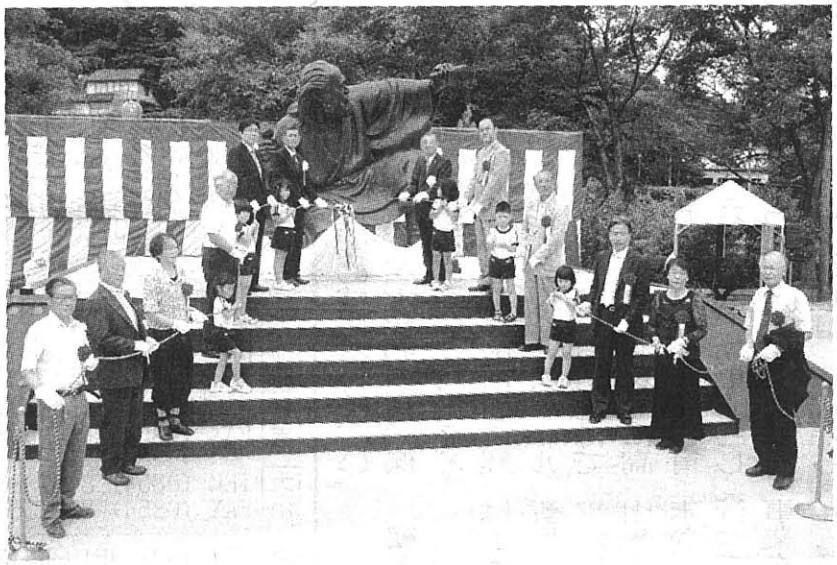
同社は総合水管理システム「水神」を主力製品としており、小松社長が理事長を務める財団法人人間自然科学研究所を通じて、出雲地方の治水の偉人である周藤彌兵衛、大梶七兵衛、清原太兵衛の「出雲三兵衛」の顕彰を支援、推進している。同町は小松社長の出身地でもある。

設置された銅像は、高さ2・65㍍、幅2・8㍍、奥行1・7㍍で、重さは1・3㌧。山陰で組織された歩兵第63連隊を含む北支那方面軍と中国軍が激突した台児荘の戦い（1938年）の舞台となった中国山東省棗庄市で、約5カ月かけて制作した。デザインは飯南町出身の童話挿絵画家、故高田勲さんによるもの。

銅像のモデルとなった周藤彌兵衛の3代目、良利（1651―1752）は、当時はんらんを繰り返していた同町を流れる意宇川を直線化しようと、1706年、川の流れを大きく迂回させていた剣（つるぎ）山で、切り通し工事を開始。以後40年以上にわたり、非常に固い石英安山岩の岩山に槌（つち）をふるい、鑿（のみ）を打ち、1747年に「日吉切通し」を完成させている。

今年4月に公布、7月に施行された水循環基本法において法定化された「水の日」に合わせて行われた除幕式には、矢野会長、小松社長のほか、関係者や地域住民約120人が参加。矢野会長は「周藤彌兵衛翁がいなかったらこの地域はなかった。銅像の設置は、会にとって長年の願いだった」と話し、小松社長に謝辞を述べた。小松社長は顕彰会について「これほど献身的な団体はないと思っている」とその活動を称え、「これから世界平和の流れを生み出すのが我々の使命。出征兵を見送ったこの地から、自然の営みと新しい科学と技術を組み合わせた新しい潮流を世界へと発信していきたい」と銅像設置への思いを語った。

来賓や地元のひよし保育園の園児らによって銅像から幕が外されると、その迫力ある姿に大きな拍手が送られた。鳥取県選出の浜田和幸参院議員は、来賓あいさつで「島根や鳥取といった地域の垣根を越えて、広い視野で物事を考える時代。中国で作られたこの銅像の設置を機に、自然と共に生きることこそ、日本から世界に発信するメッセージとしたい」と述べた。



除幕された周藤彌兵衛の銅像＝1日、松江市八雲町の日吉親水公園

2014.8.18 日本水道新聞

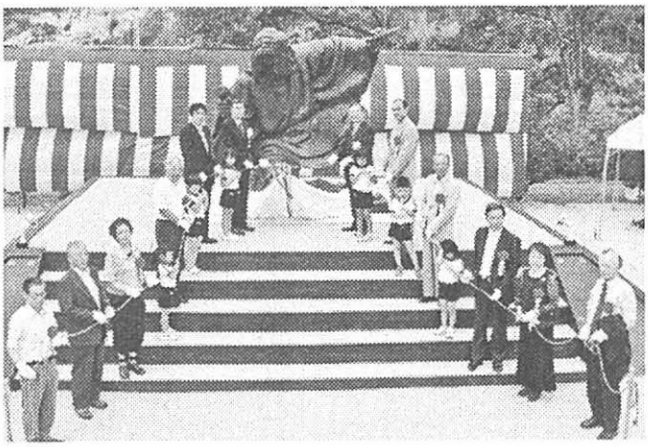
彌兵衛翁の銅像除幕

偉業を称え「水の日」に 小松電機産業が寄贈

本紙が7月7日付から連載している「悠久の河周藤彌兵衛翁物語」（村尾靖子作）の舞台となった松江市八雲町日吉の日吉親水公園で1日、主人公・周藤彌兵衛翁の銅像除幕式が、来賓はじめ関係者ら約200人が出席して盛大に行われた。この日は水循環基本法の制定後、法制化された初の「水の日」。彌兵衛翁の不屈の志と生き方、勇気と愛、平和の大切さを伝える格好の一日となった。

式典は周藤彌兵衛顕彰会（矢野秀行会長）、小松電機産業（小松昭夫社長）・人間自然科学研究所が主催。来賓はじめ地元のひよし保育園の園児らによって銅像から幕が外され、大きな拍手が沸き起こった。

銅像は高さ2・65㍍、幅2・8㍍、奥行1・7㍍で重量は1・3㌧。中国・山東省棗庄市で約5カ月かけて製作。デザインしたのは、本紙連載「悠久の河」の挿絵を描いた飯南町出身の童話挿絵画家、故高田勲さん。



高さ2.65mの銅像を披露

主催者を代表して矢野会長は「今まで彌兵衛翁を題材にした本の出版や銅像の制作、『大志の都』構想の提案などを行ってこられた小松昭夫小松電機産業社長・人間自然科学研究所理事長から銅像寄贈のお話をいただき、ありがたくそのご厚意をお受けした。ただ設置するだけではなく、訪れた人に彌兵衛翁の偉業をさらに理解していただき、この地を中心とした人々の交流や賑わいを創出していきたい」と述べた。

小松社長は「顕彰会を中心に彌兵衛翁の偉業を世界に広めたい。この建立を機に世界平和の流れを生み出すのが私の使命。自然の営みと新しい科学技術を組み合わせた新たな潮流を世界へ発信していきたい」と、建立の熱い思いを語った。

来賓の浜田和幸参議院議員は「水は味方にすれば強いパワーを発揮するが、敵に回せばこれほど恐ろしい存在はない。水害も津波も猛威を振るう。しかし、そういった水や自然を理解し、自然とともに生きることこそが、これからの時代、日本が世界に向かって発信すべき大きなメッセージではないか」と建立の意義を語った。

2014.8.21 水道産業新聞

水の偉人の銅像を贈呈

小松電機産業 松江市内に設置し除幕

周藤彌兵衛翁像の贈呈および除幕式（主催＝小松電機産業など）が1日、松江市八雲町の日吉親水公園で行われた。私財を投じて山を開削し、河川改修した水の偉人の業績をたたえるもので、関係者ら約２００人が出席した。

小松社長ほか関係者らが除幕

周藤彌兵衛顕彰会事務局長の経過報告、同会会長のあいさつに続き、銅像を同会に寄贈した小松昭夫・小松電機産業代表取締役（一般財団法人人間自然科学研究所理事長）が「水循環基本法の成立後初となる水の日に、銅像を寄贈できて光栄。今後も協力し、偉人の業績を国内外に広めたい」と決意を述べた。

小松社長

目録や感謝状の贈呈に続き、関係者や地元園児らが除幕。また、来賓の島根県教育庁教育次長、地元選出の国会・県議会議員、市議会副議長らが祝辞を寄せ、万歳三唱で設置を祝った。

設置された銅像は高さ2・7㍍、幅2・8㍍、奥行1・7㍍で、重さ1・3㌧。周藤彌兵衛は約３００年前、現在の松江市内を流れる意宇川の洪水被害を防ぐため、56歳から97歳までの42年間、山をノミと槌で切り開き、河川の切通しを完成させた。

周藤彌兵衛翁の物語から生まれた やくも水神

～「地方創生」実現する、広域クロスオーバー管理～

小松電機産業
www.komatsuelec.co.jp

小松電機産業は、シートシャッターhappy gate 門番システム、クラウド総合水管理システム「やくも水神」ネットワーク、人間自然科学研究所の3つの事業を通じて、「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」「おもしろ　おかしく　たのしく　ゆかいに」「三方良し、後利」を社是、経営理念、行動指針におき、対立統合発展を繰り返されるなかで、スパイラル状に21世紀の平和の文化が広がることを目指し活動している。

本社がある島根県松江市は豊かな汽水を湛える宍道湖と中海の中間に位置し、江戸時代から今日まで、治水が政治の最重要課題である。1973年、ポンプの修理業から始まった同社の水事業は、こうした出雲の歴史と文化を背景にICTを組み合わせて「やくも水神」として全国展開する製品に成長。システムは自治体間の口コミで広がり、2014年7月現在、北海道から沖縄まで、360自治体、7600施設で稼働。まちづくりや人材活用を実行するために安倍内閣の重要課題「地方創生」に応え、地域発全国そして世界に広がる事業モデルとなっている。

治水の偉人・周藤彌兵衛翁の大銅像除幕

写真1　1995年4月　小説・児童文学・漫画の一挙刊行を記念して開かれた周藤彌兵衛翁シンポジウム（松江市）

治水の偉人・周藤彌兵衛翁（すとう・やへえ：1651～1752年）は、剣山と呼ばれる岩山に阻まれ、蛇行して村にたびたび水害を引き起こした意宇川の流れを変えるため、56歳から私財をなげうち、42年もかけて、ノミと槌で山を切り開いた。現場は「剣山切通し」と呼ばれ、今でもノミの跡が残る。

翁の顕彰事業は、「水と志」で事業展開する同社の一貫した姿勢の中で進められて来た。文献等の資料が少なかった周藤翁の物語を、「世界に通じる仕事」「今の時代だからこそ必要」と考えた小松昭夫社長は、1994年、一村一志運動の提唱とともに小説・児童文学・漫画「周藤彌兵衛」を一挙に刊行、出版記念シンポジウムを開催して、周藤翁を「やくも水神」展開のプランドと位置づけた（**写真1**）。続いて宍道湖の増水から松江を守るために人工河川「佐陀川」の造成工事を進めた清原太兵衛（きよはら・たへえ：1712～1788年）、砂地だった出雲平野に多くの水路を引き新田開発を行った大梶七兵衛（おおかじ・しちべえ：1621～1689年）をそれぞれ刊行、「水の偉人」顕彰事業を軌道に乗せた。

写真2　2014年8月1日　水循環基本法成立後初の「水の日」に、松江市八雲町で除幕された周藤彌兵衛翁像

2002年、日中国交正常化30周年を記念して、孔子、孟子、周藤翁、清原翁の4体の銅像を、日中戦争の激戦地・中国山東省棗荘市で制作。孔子孟子像は鳥取県の日本最大中国庭園「燕趙園」に、周藤・清原翁像は小松電機産業本社玄関ホールに建立された。こうした経緯をもとに、8月11日「山の日」が制定され、水資源循環基本法が成立して初めての「水の日」である2014年8月1日に、前比8倍になる大銅像（2.7m×2.8m×1.7m）を国交正常化40周年を記念して新たに制作。松江市八雲町の親水公園に建立した（**写真2**）。

ズットナー像を迎えシンポジウム

周藤翁の大銅像事業と同時に、同社はヨーロッパで女性初の平和賞受賞者になったベルタ・フォン・ズットナー（1843-1914年）の胸像制作を進めている。小松社長は2013年

088-091　28印　小松電機産業_八.indd　88-89　14/09/19　14:17

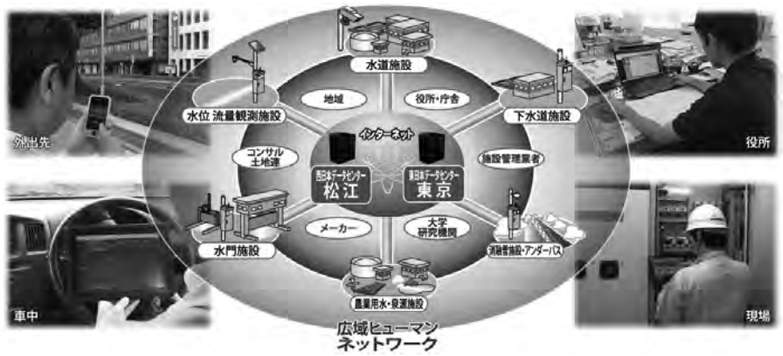


写真 3　水神ネットワーク図

9 月、オランダ・ハーグの世界平和宮（国際司法裁判所）100 年記念式典出席から 2014 年まで、3 年連続でヨーロッパを訪問。カーネギー財団がオランダ・ハーグの国際司法裁判所 100 周年を記念して制作した 2 体のズットナー像のうち、ハーグ市庁舎で展示されている胸像の 2 号像を制作。ウィーンでこの像が長期展示されるにあたり、第一回ズットナー賞を受賞した。作者イングリッド・ロレマ氏はさらに 3 号像を制作中。2014 年 11 月 23 日に松江市で開かれる記念シンポジウムで、来日と同時に公開される予定だ。小松社長は「周藤翁をトロイの木馬にみたて、そこからズットナー像が何体も生まれるイメージ。4 号像以降は、日本で制作して世界に広がるようにしたい」と話している。

クラウド総合水管理システム「やくも水神」とクロスオーバー管理

周藤翁の事業から 250 年を経た 2000 年 9 月、政府は情報化による全国各地からの新産業創出を目指して e–Japan 構想を打ち出した。「やくも水神」は、この構想を受けて全国展開を開始。従来の中央監視方式と異なり、役所側はサーバー設置のコストがかからないこと、現場にいながら数値を確認し遠方の技術者と相談しながらの施設運用ができるようになり、経験の無い担当者であっても熟練者と同じような管理ができる点などが好評価され、国交省の成功モデル（兵庫県多可町、長崎県長崎市）として紹介された（2003 年 11 月、下水道における ICT 活用に関する検討会）。

写真 4　配水地、マンホールポンプなど水関連施設を、一つの画面で確認できる

市町村合併により、自治体は職員削減と同時に、管理エリアの広域化と上下水統合管理を進める流れが広がっている。広域なエリアに点在する施設を上下水、簡易水道、農漁村集落排水、農業用水、ゲート、消雪など水に関するあらゆる施設を一つの地図画面で表示。職員の負担を大幅に軽減する「広域クロスオーバー管理」を提唱（**写真 3**）。導入すれば高速道路や一級河川の流域でつながる複数の自治体が、地域をエリアで区分けして職員を配置。上下水に限らずエリア内にある様々な水関連施設の情報を、タブレット端末やスマートフォンを使って場所を選ばず状況確認と管理ができる（**写真 4**）。

2006 年に 4 町村が合併した福島県南会津町では、消防団員を務める役場職員が、貯水槽の水位を「やくも水神」を使ってスマートフォンで確認しながら、消防活動をする事例が 2013 年 10 月にあった。住宅地の高低差が 100 m 以上あり、広大なエリアで「広域クロスオーバー管理」を実現するため、やくも水神の導入が進んでいる。

富山県など消雪施設の導入が進んでいる地域ではグループ制御とカメラ監視による効率的な施設運用を進める「やくも水神」消融雪設備管理制御システムの導入が進んでいる。本年からはスマートフォンやタブレット端末でも遠隔操作ができるようになった（**写真 5**）。

福井県で 4 市町にまたがって進められている農業用水のパイプライン化事業、九頭竜川農業省水再編対策事業でも、やくも水神は試験導入され、広域管理が進められている。

写真 5　消融雪設備管理制御システム

21 世紀の村おこし

周藤彌兵衛翁は「木には木の心、水には水の心、石には石の心がある。その心がわからなければいい仕事は出来ない」と説いたという。「やくも水神」は人類の特性を直視、“使う人の気持ちに沿い、衣食住が足った世界における理想的な管理システムのあり方”を問う、人間自然科学研究所の一村一志運動と ICT が融合した“21 世紀の村おこし”を念じた製品である。

企業データ　小松電機産業株式会社

〒 690–0046　島根県松江市乃木福富町 735–188			TEL：050–3161–2490 FAX：050–3161–3846
代 表 者	小松 昭夫	年　商	37 億円
設　立	1981 年 12 月	業　種	シートシャッター「門番」、総合水管理システム「やくも水神」の製造・販売
資 本 金	1 億円		

088-091　28印　小松電機産業_八.indd　90-91
14/09/19　14:17

意宇川治水工事 不屈の精神

周藤彌兵衛の生涯紡ぐ

作家・村尾さん

取材重ね「悠久の河」出版

江津

江津市都野津町在住の作家、村尾靖子さん(71)が、江戸時代に松江市内を流れる意宇川の治水工事に生涯を捧げた周藤彌兵衛の偉業と人生を物語にした「悠久の河」(今人舎)を出版した。村と住民を洪水から守るため、42年間たった一人で槌と鑿で岩山を開削して川の流れを変えた彌兵衛の不屈の精神と誠実な生き方、支えた家族の愛を感動的に描いている。(渡部豪)

「悠久の河」を手に執筆時を振り返る村尾靖子さん

日吉村(現在の松江市八雲町日吉)の庄屋だった彌兵衛は1706年、私財をなげうち、大雨のたびに氾濫して村に壊滅的被害をもたらす意宇川の治水工事に着手。56歳からは一人で、硬い岩でできた剣山を42年間こつこつと切り開き、水害から村を守った。

村尾さんは執筆に当たり、日吉地区を訪ね、鑿の痕が残る岩場や周藤家の墓などを取材。数少ない資料を手掛かりに、幾多の苦境に直面しても鑿を打ち続けた彌兵衛の姿、妻や子どもたちの愛、神の山とされる剣山を切り崩す彌兵衛に対する村人の複雑な心情に思いをはせ、物語を紡いだ。

多くの子どもに読んでほしいと願い、漢字に振り仮名を付けたほか、全ページにカラーの挿絵を添え、英語の訳文も載せた。

村尾さんは「彌兵衛は『村の民の幸せがなければ庄屋の幸せはない』との信念で、諦めず大事業を成し遂げた。郷土にこんな素晴らしい人がいたことを、多くの人に知ってほしい」話している。

A4判80ページで、2500円(税別)。全国の書店で販売している。

街角トピックス

松江

◆水と火の祭を住民楽しむ

松江市八雲町を流れる意宇川の治水工事に貢献した周藤彌兵衛の銅像が、同町に建立されて3年を迎えたことを記念した「水と火の祭」がこのほど、同町日吉の八雲町日吉親水公園であった。集まった町民約150人が、幻想的なかがり火のもとで、踊りや太鼓のステージを楽しんだ。

八雲町の住民有志でつくる「八雲なでしこ」の17人が、松江だんだん踊りを披露＝写真。住民も踊りの輪に加わり、盛り上がりをみせた。このほか、神戸川太鼓（出雲市）が「七兵衛太鼓」など3曲を演奏し、来場者は力強い太鼓の音に聞き入った。

「水と火の祭」は、財団法人・人間自然科学研究所を母体とする八雲志人館が主催し、今年で2回目。（平井優香）

安来

◆「平和」考えるコンサート

戦後、フィリピンの日本人戦犯釈放に尽力した画家・加納莞蕾（かんらい）の命日にあたる15日、莞蕾ゆかりの市加納美術館（安来市広瀬町布部）に隣接する布部交流センターでファミリーコンサートがあり、家族連れらが女性デュオの演奏を楽しみながら平和や家族について考えた＝写真。

終戦記念日でもあるこの日に、莞蕾が求め続けた「平和」や大切にした「家族」についてあらためて考えてもらおうと同館と同センターが開催。家族連れら50人が参加した。

ともに浜田市在住のフルート奏者・杉本さえみさんとバイオリン奏者・中山ゆき子さんでつくる「デュオ・アフェッティ」が、クラシック音楽やアニメ映画の主題歌など12曲を楽しく演奏。戦時中の家族を題材に平和の尊さを訴えるアニメの上映もあった。安来高校3年、角森有希さん(17)は「あらためて戦争を繰り返してはならないと感じた」と話した。（佐伯学）

水の偉人たたえ 松江で顕彰祭

関係者ら祈りささげる

祈りをささげる参加者

世界平和と国内外の水の偉人の功績をたたえる「水の偉人覚醒顕彰祭」（小松電機産業・人間自然科学研究所主催）が8日、松江市袖師町の袖師地蔵前で行われた。

関係者ら約2千人が参加。袖師地蔵と並んで立つオーストリアの小説家で女性として初めてノーベル平和賞を受賞したズットナーの像の前には、全国と世界の水の偉人の功績が記された灯籠170基が並べられ、灯がともされた。住職が護摩祈禱（きとう）する中、参加者が祈りをささげた。

この日は同市乃木福富町の同社ホールで座談会も開かれ、龍谷大の平田厚志名誉教授、李洙任教授、広島県日韓親善協会の玉木実常任顧問、地域自立総合研究所の吉田正博所長らが意見交換した。

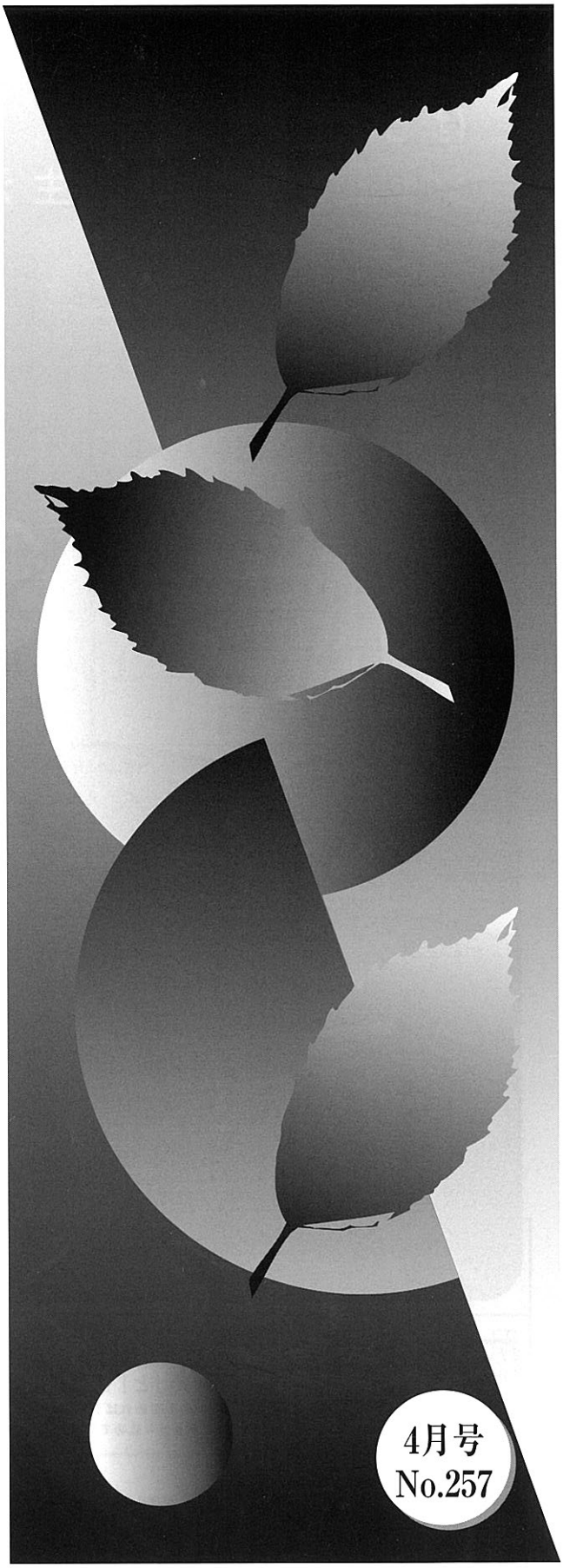
同社の小松昭夫社長は「新しい共生の文化を創ることが未来につながる」と話した。

月刊建材ナビ　2020年4月1日発行　4月号（毎月1日発行）

月刊

建材Navi

ナビ



特集：高意匠・高断熱・高機能スライディングドアで新たな需要獲得を狙う「住宅用玄関ドア／玄関引戸」

特集：都市再開発プロジェクトの本格化で活気を取り戻すビル用「オーダー／規格トップライト・ドーム」市場

4月号
No.257

小松電機産業／人間自然科学研究所

日本の「水道の父」と評される明治政府招聘の顧問技師「バルトン銅像」の制作・設置を提唱

小松電機産業は、クラウド時代の地政学をプラットフォームに、クラウド総合水管理システム「やくも水神」、高速シートシャッター「happy gate 門番」、「人間自然科学研究所」の3つの事業を通じて「対立から共生の文化へ」の転換を提唱、創業50年を迎えようとしている。

小松昭夫社長は、これまでにも「水の偉人」の顕彰活動を進めてきたが、今回は日本の「水道の父」とも評され、松江市の上下水道の基本設計にも携わった明治政府が招聘した顧問技師「ウィリアム・K・バルトン銅像」の制作・設置を提唱、賛同者を募っている。すでに2006年にバルトン生誕150年、来松江110周年を記念して、松江市の水がめ・千本ダム近くの忌部浄水場構内に顕彰碑の建立を行っている。

ウィキペディアによると、ウィリアム・K・バルトンは、1856年5月11日スコットランド・エディンバラ生まれ、1881年英国衛生保護協会の主任技師となった。渡欧中であった永井久一郎（永井荷風の父）の推薦を得て、明治政府の内務省衛生局のお雇い外国人技師として1887年(明治20年)に来日、東京市の上下水道取調主任に着任した。同時に帝国大学工科大学（のちの東京大学工学部）で衛生工学の講座をもち、台湾水道の父と評される浜野弥四郎など、何人かの著名な上下水道技師を育てている。

バルトンの設計は帝都上下水道の基本計画となり、東京、神戸、福岡、岡山、下関、松江など、全国23の都市の衛生状況の調査や上下水道の設計に関わった。松江市には、1895年（明治28年）7月23日に訪れ、探検調査し8月2日帰京。その後松江市に再調査を依頼し、1899年（明治32年）内務大臣に「サミズ泉を最上の水源地と選定」という調査結果を報告。このバルトンの調査が基礎となって松江市の近代水道が完成したといわれる。

そうした活動ぶりは、「バルトンは教育を通じて日本衛生工学を導入した第一人者で、日本の水道史上は勿論、衛生工学史上もっとも功労のある人物」と評価された。日本での任期を終え1896年（明治29年）に当時の台湾に渡り、台北の上水計画を進めたが、炎暑の中で調査活動を重ねた末に風土病に罹り、1899年（明治32年）8月5日、43歳で死去。その墓所は故郷のスコットランドではなく、東京・青山霊園にある。松江市とも縁の深い「水の偉人」顕彰活動の一環として「バルトン銅像」の製作・設置が提案されている。

日本海新聞

「治水の郷土偉人」図書贈る

小松電機産業　地元小学校へ

岩井教頭（左）に目録を手渡す小松会長兼社長

松江市

小松電機産業（松江市乃木福富町）と同社が管理する人間自然科学研究所は、江戸時代中期に洪水から村を守るために私財を投じて水路を開削した旧八雲村の周藤弥兵衛ら郷土の偉人に関する漫画や小説、児童文学など約50冊を同市浜乃木5丁目の乃木小に贈った。

治水に関する機器を扱っている同社が、弥兵衛と清原太兵衛、大梶七兵衛の3人を「治水の偉人」と位置付け、同研究所は1994年から関連図書を順次発刊していた。

同校の図書室には弥兵衛に関する図書が数冊しかなく、授業に活用するには不足していた。図書は既に絶版になっていたが同校が探していたところ、同社から寄贈の申し出があった。

同社であった寄贈式で、小松昭夫会長兼社長が岩井五月教頭に目録を手渡し、「本を読んで実際に現場に行き、水について感じてもらいたい」と期待。岩井教頭は「たくさんの本をいただきありがたい」とお礼を述べた。（高塚直人）

郷土の「水の偉人」図書を小学校に寄贈

小松電機産業など

治水に貢献した全国各地の先人を「水の偉人」として顕彰している小松電機産業（松江市乃木福富町）と同社の人間自然科学研究所は8日、地域を水害から守った郷土の偉人に関する図書を、同市鹿島町の佐太小に寄贈した。

贈られたのは、江戸時代に水害対策で宍道湖と日本海をつなぐ佐陀川を開削した清原太兵衛ら、島根県内で地域のために尽力した3人に関する漫画や児童書、小説など。いずれも同研究所が以前、発行した。佐陀川のそばに位置する同校が児童に伝えるための資料を探していたところ、同社が図書の寄贈を申し出た。

小松会長兼社長（右）から贈られた目録を手にする小山校長

同社で寄贈式があり、小松昭夫会長兼社長から目録を受け取った小山美子校長は「地域のために行動した先人の思いを引き継ぎ、将来を担う子どもたちを育てたい」と述べた。

併せて、水の偉人顕彰事業の創成期を支えた、いずれも同市内の佐々木武男さんと交易場修さんに感謝状が贈られた。

2023年11月21日　日本海新聞掲載